

アイヌ民族の荷縄

—地域差と年代差、及び用途による形態差に関する基礎的検討—

大坂 拓

- 目次
- 1 はじめに
 - 2 先行研究の到達点と課題
 - 3 対象資料の選定
 - 4 分類
 - 5 分類群間の地域差・年代差
 - 6 用途による形態差
 - 7 荷縄使用の変容
 - 8 さいごに

Key Words アイヌ民族 (Ainu)、荷縄 (Burden strap)、死者用荷縄 (Burden strap for the dead)
仮器化 (Symbolization)

1 はじめに

本稿では、アイヌ民族の荷縄を分析対象として、製作技術と素材に着目した分類を提示し、地域差と年代差を具体的に明らかにするとともに、機能による形態差について資料の実態に即した解釈を提示する。また、分析結果を基に博物館収蔵資料の組成を検討すると、明治期以降にアイヌ民族が経験した生活文化の変化を物質文化から裏付けられることを指摘する。

本稿で荷縄と呼称するのは、アイヌ語北海道方言で tar (萱野 1996: 297; 田村 1996: 700) と呼ばれるもので⁽¹⁾、荷物を結束した状態で前頭部や胸に掛けて使用される。やや特殊な用法としては、葬送儀礼にあたって副葬品を収めた鞆を運搬する目的で使用されるほか⁽²⁾、木製の棒や板と組み合わせて子負に用いる場合もある(図3)。

前頭部にかける方法(図2: 1~3)と胸にかける方法(図2: 4)⁽³⁾の使い分けは、重量が軽い場合に胸にかけるほか、他村を訪れる際の礼儀作法として、男性は村人に行き会おうと荷縄を前頭部から胸に掛け替え、女性の場合には他村では荷縄を前頭部に掛けないとする記述がある(満岡 1987: 32, 142)。

現在では日常生活の中で用いられることは稀になった民具の一つであるが、製作技術のマニュアルも刊行されており(財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構編 2007)、伝統工芸品としての販売や文化継承を目的として、今日でも各地で製作され続けている。

先行研究では、北海道では全体を一体で編み上げるのに対し、サハリンでは額当てを別作りにするという地域差が指摘されている(名取 1934a, b)。また、使用者の性別や用途によって長さや素材の差異があることや、葬送儀礼用のものはその他のものと形態が異なるとする報告がある(萱野 1978ほか)。

ただし、従来の記述は、網羅的な民具の紹介の中の一項目であったため概説的な水準に留まるものや、詳細ではあっても限られた地域における事例の紹介という性格が強いものに限られており、地域差が資料からどの程度裏付けうるのか、用途による形態差が地域を越えてどの程度普遍的なものであったのかは明らかになっていない。また、素材や製作技術の年代学的変化は全く未着手の課題となっている。

本稿の結論の一部を先に述べれば、従来「サハリン」「北海道」といった単位で把握されてきた地域差は、北海道／サハリン・千島列島という地域差として捉えられ、

大坂 拓: 北海道博物館アイヌ民族文化研究センター アイヌ文化研究グループ

(1) sisamsike 「和人の荷負具」等の名称で呼ばれる荷縄は対象から除外する。

(2) 日本語名称を「死者用荷縄」とする場合もあるが、墓地までの道程では参列者が副葬品を入れたカバンを負うために使用するため、本稿では意味をやや広くとって「葬送儀礼用の荷縄」と呼称することとする。

(3) 図2:4は「ピリカ会」が発行した絵葉書である。森町教育委員会蔵村岡文庫に含まれる「白老紀行」(1910年)に「アイヌのヤンカラフテ(久々の会見)の図」などを撮影したことが記載されていることから(北海道立アイヌ民族文化研究センター編2005: 36)、この時に撮影された中の一枚と推定した。



図1 荷縄の部位名称（北海道大学・植物園 106）



1 荷縄を前頭部にあてて背負う女性（年代・地域不明）



2 荷縄を前頭部にあてて背負う男性（1909年頃・八雲町落部）



3 荷縄を前頭部にあてて背負う女性（1909年頃・八雲町落部？）



4 荷縄を胸にあてて背負う男性（1910年・白老町）

図2 荷縄の使用状況



1 (北大植物園・博物館 187)

図3 子負棒の使用方法



2 荷縄を用いた子負の状況 (年代・地域不明)



1 (新ひだか町静内アイヌ民俗資料館 10316)

図4 収納時の結束方法例



2 (新ひだか町静内アイヌ民俗資料館 10383・10384)

素材や製作技術の面では、1950年代、1970～80年代に変化が認められる。また、戦後に収集された荷縄の大部分は葬送儀礼用として製作された可能性が高く、日常生活の中で使用が衰退した後も、葬送儀礼の場では必要とされていたことがその背景にあるものと考えられる。こうした点を具体的な資料の分析によって明らかにすることが本稿の目的である。

アイヌ民具資料は、博物館に収蔵されている資料の多くで収集地や収集年代といった基礎的な背景情報が欠如しているうえ、背景情報を有する少数の資料の分布には地域的偏りが著しい。資料数の限界から先験的に地域区分を設けてから分類に着手することは困難であり、網羅的な資料集成を行ったうえで分類し、分類群の地域差・年代差を検討する際には、少数の資料に付属した背景情

報によりつつ、背景情報の復元、民族誌や写真記録等との照合という手続きを踏む必要がある。本稿の記述には冗長な部分があるが、資料の上記のような特性によるものとしてご寛恕を乞いたい。

2 先行研究の到達点と課題

(1) 鳥居龍蔵の研究

鳥居は1899年5～7月に千島列島を訪れ、1884年の北千島からの強制的な移住によって色丹島に居住していたクリルアイヌの調査をおこなっており、民族誌的記録とともに収集した民具資料を報告している(鳥居 1903; Torii 1919)。

荷縄については、子負具として用いられた資料2点

(Torii 1919 : Fig.39)、及びその使用状況の写真図版 (Torii 1919 : Fig.40, PL.VII) を示しつつ、同様の使用方法が北海道、サハリンなどで見られることを指摘した。

(2) 杉山壽榮男の研究

杉山は「アイヌの編物」(杉山 1940)の中で、荷縄の額当てに特に着目しており、刀帯等の製作技術との共通性について触れているほか、文様のある荷縄を「shikotar」と呼ぶとしている(杉山 1940 : 70)。

また、荷縄の未製品を図示して製作過程を解説しており、2本の棒に経糸36本を固定し、経糸2本を一組としていることなどを記述している(杉山 1940 : 71)。

(3) N.G.マンローの研究

N.G. マンローの死後にまとめられたAinu:Creed and Cult (Munro 1962)では、葬送儀礼に関する記述の中で、荷縄について以下の指摘がなされている。

“Headband and mittens for the corpse, and black and white cord to lace the mat in which it is wrapped. Headband is woven with three strands instead of four for the living” (Munro 1962 : PLATE X XIV) ⁽⁴⁾

“Of three articles specially prepared for the dead the most significant is the tara or headband for supporting burdens on the back. The ordinary one has four cords joined to one, but this one has only three” (Munro 1962 : 126)

以上の記述は、いずれも荷縄の額当て両端から縄部にかけて伸びる分岐部(図1)の形態に着目し、葬送儀礼用では3本に、それ以外では4本に作られるとしたもので、聞き取り調査によって得られた情報なのか、収集した資料に基づくマンロー自身の判断なのかは明らかではない点に注意が必要とはいえ、葬送儀礼用とそのほかが明確に区別されると記載した最初のものである⁽⁵⁾。

(4) 河野広道の研究

河野は「北方文化写真シリーズ」の一つとして企画された『アイヌの生活』の中で、荷縄を用いる際に前頭部または胸部に当てて使用することや、山猟、薪運び、子負いなど、用途に応じて複数の種類が常備されていたことを紹介している(河野 1956 : 35)。

(5) 林 善茂の研究

林は、1958年から1979年にかけて、アイヌ民族の農耕に関する論文を『北方文化研究報告』、『北方文化研究』、『民族学研究』に連続して発表している。荷縄については、1959年に発表された「アイヌの収穫・貯蔵技術」(林 1959)の中で収穫物の運搬方法との関連から言及されており、編袋と組み合わせて使用する方法についても詳細な記述がある。素材にはシナノキ (*Tilia japonica*) ⁽⁶⁾、オヒョウ (*Ulmus laciniata*)、ツルウメモドキ (*Celastrus orbiculatus*) の韌皮繊維を用いることや、子負に使用する荷縄は短い傾向があることに言及がある。ただし、いずれの情報も調査地などは特に記載されていない。

(6) 岡村吉右衛門の研究

染色作家の岡村吉右衛門は、1960年代前半に北海道各地のアイヌ民族から聞き取りをおこなって得られた知見を雑誌『民芸手帖』に紹介しており、荷縄に関する情報は平取町二風谷で萱野茂から聞き取られたものが「日高アイヌの編物(二)」(岡村 1962b)としてまとめられている。

素材にはシナノキの韌皮を煮沸して繊維に加工したものをを用い、男物を「オッカヨ・タラ」、女物を「シコ・タラ」と呼ぶことや、男物がより丁寧に作られているとされていること、葬送儀礼用の「ライクル・タラ」はやや小さく作られるとしている。

額当ての緯糸に関して、木綿糸を多用するものの、「近頃ではボロ裂きを主に用います。当たりが柔いからでしょう」(岡村 1962b : 33)としている点は、荷縄の年代学的変化に言及した数少ない記述として重要である。

(7) 萱野茂の研究

萱野によるアイヌ民具研究は、沙流川流域のアイヌ民具を網羅することを意図した『アイヌの民具』(萱野 1978)としてまとめられており、荷縄に関しても、それ以前の研究を凌駕する精緻な記述がなされている。

荷縄は煮沸処理したシナノキの韌皮繊維を素材とした全長4m程度のものが一般的ながら、男性用のものはツルウメモドキやエゾイラクサ (*Urtica platyphylla*)、ムカゴイラクサ (*Laportea bulbifera*) ⁽⁷⁾ の韌皮繊維を用いて長く編むとしている(萱野 1978 : 125)。また、子

(4) 小松哲郎はこの部分を「死に装束の手甲・脚絆および墓産にくるんだ故人の遺体を運ぶための紐。この紐は、白一本と黒二本の三本の縋り糸で編みである。(生きている人々が日常用いる紐は、四本の縋り糸で編みである)」(小松 2002 : 158)と訳しているが、原文では後半の主語はHeadbandであり、筆者は「死者用の荷縄と手甲、及び遺体を包んだ墓産を縛る白と黒で編まれた紐。この荷縄は3本の縄を合わせるのに対し、日常的に用いるものは4本の縄を合わせる」という内容と理解している。

(5) マンローによる記載以前の例を上げれば、名取が葬送儀礼用の荷縄を普段用いるものと差異がないとしている(名取 1934a)。

(6) 学名は筆者が追記した。ただし、シナノキと呼ぶものの中には、シナノキのほかオオバボダイジュ (*Tilia jmaximowicziana*) が含まれる場合がある。

(7) 原文では「ハイキナ(いら草)」、「カバイ(背の低いいら草)」(萱野 1978 : 125)と記載されている。同書の別頁に「ハイキナ(エゾイラクサ)」、「カバイ(ムカゴイラクサ)」(萱野 1978 : 38-39)との記載があるため、これを参照した。

負用は全長3m程度とやや短いとしている（同：126）。葬送儀礼用の荷縄については形態の差異に関する言及は特になされていないものの、raykur tarの名称で、ほかの葬送儀礼用具とともに準備されることが紹介されている（同：312）。

そのほかの民族誌的記載としては、狩猟の際に携行してロープとして使用することや、子負には1945年前後まで使われていたことなどに言及されている（同：126）。

(8) 藤村久和・花輪陽平の研究

藤村久和は、白老町でpon tarと呼ばれる葬送儀礼用荷縄について、結束方法を通常と逆にすることなどを紹介している（藤村 1976：88）⁽⁸⁾。

出産の際に力綱nuwap tar（知里 1954：178-179）として荷縄を使用する方法については、藤村久和・花輪陽平がまとめており、女性が用いる荷縄を転用し、阿寒ではお産に使用した後は他の用途に使用されないとしている（北海道教育委員会 2017：132）

(9) 課題

先行研究では、主に使用者の性別によって素材、長さが区分されることが指摘されており、男性用が長く、女性用が短いこと、子負用は短いことなどが示されている。また、葬送儀礼用についてはマンローが分岐部の形態が異なるとしているほか、やや小さいとする記述が複数確認された。

ただし、情報が得られている地域は、千島列島を除けば日高西部に偏っており、先行研究で言及されてきたような用途による違いが、博物館などに収蔵された資料からどの程度裏付けられるのか、同様の規範が地域を超えて共有されたものか否かの確認が、第一の課題となる。年代学的な変化については、素材の変化に関する岡村の言及が唯一のものであり、素材と製作技術の面からの確認を、本稿の第二の課題とする。

3 対象資料の選定

資料の選定にあたっては、博物館等が刊行している目録類、北海道教育委員会による民具資料の所在調査報告などを参照したものに、国立民族学博物館から提供を受けた所蔵資料データを加えて簡易な一次リストを作成したのち、背景情報が含まれる資料を所蔵する10機関を対象に資料調査を実施し、実見可能な資料171点について

観察ノートを作成した。

観察ノートに記載した情報に、背景情報の検討結果を加えたものをまとめたのが属性分析表（表5）である。収集地等の情報は、収蔵機関が有する背景情報を基盤としつつ、下記の要領で統一を図った。

収集地は、現在の市町村・地区名称に対比可能なものは改めた。ただし、「日高」・「サハリン」のように、市町村に対比困難なもの⁽⁹⁾は原データをそのまま示したほか、「根室」のように過去に遡って市町村名称ではない可能性が否定できないものも原データのままとした。

製作者については明記されている場合はこれを示したが、中には所蔵者として記載されている人物が製作者でもあったケースが存在する可能性がある。人名については、既に多くの刊行物で氏名が知られている場合に限って氏名を示した。

収集／収蔵年代については、寄贈や移管などで博物館等に収蔵される以前に収集された年代が明らかな場合については収集年として記載した。

対象資料のうち、収集地が明らかなものの内訳は、旭川市13点、新ひだか町13点、平取町10点、色丹島・白老町・浦河町3点、幕別町・鶴居村2点、千歳市・登別市・厚真町が各1点となっている。

この他、分布の検討には、アメリカ合衆国ペンシルバニア大学考古学人類学博物館所蔵資料3点、ロシア連邦ロシア科学アカデミー人類学民族学博物館所蔵資料1点、ロシア民族学博物館所蔵資料10点を加える。これらを分布の検討に加える理由は、インターネット上のデータベースや資料目録によって詳細な写真図版が公開されており分類群への比定が可能なためであり、分類にあたっての対象資料に加えない理由は、本稿で必要とする計測値データが得られないためである。

(1) 東京国立博物館所蔵資料

概要

東京国立博物館が所蔵するアイヌ民族資料の大部分は、1875年、1883年、1927年、1989年の4時期に収蔵されたもので、ほぼ全点を掲載した目録（以下「東博図版目録」）が刊行されている（東京国立博物館編 1992）。それぞれの時期における収蔵経緯については、佐々木利和による紹介（佐々木 1998）がある。

東博図版目録には本稿の対象となる荷縄は8点が含まれており、全点の調査を行った。収蔵時期は1875年に3点、1883年に2点、1927年に3点となっている。

(8) 久保寺逸彦は平取町での聞き取りの中で、葬送儀礼の際に背負い方が「逆負い」となっている（久保寺 1956：61）。具体的にどのような姿勢で背負うものか読み取るのが難しいが、葬送儀礼にあたっては何らかの手順を普段と逆にするという意識は白老町の事例と共通している可能性がある。

(9) 日高町は1919年に沙流郡幌去村から分村し、1943年に日高村に改称したもので、資料の収集当時には市町村を表したものではない。

1875年収蔵資料

1875年収蔵資料の受入経緯については、三浦泰之による詳細な検討（三浦 2001）があり、以下では三浦の記述に依拠しつつ、経緯をまとめておく。

資料は、1873年5月から11月にかけてオーストラリア・ハンガリー帝国の首都ウィーンで開催された万国博覧会に出品するために収集された。収集に向けた動きは、1871年2月にオーストラリア・ハンガリー帝国駐日公使ヘンリー・ガリッチから外務卿沢宣嘉に対して万国博覧会参加が要請されたことに始まり、参加方針の決定を受けて、開拓使に対しては1872年1月に、アイヌ民族資料を含む物品の収集が命じられている。

開拓使が収集した資料の内訳は、東京国立博物館が所蔵する目録『澳国博覧会出品目録 八 北海道 開拓使ヨリ差送ノ品』（以下「開拓使出品目録」）に記載があり、総数1104件（内アイヌ民族資料215件）となっている。ただし、件数の中には複数からなるものも多数含まれるため、実際の点数はこれよりもかなり多い。

開拓使が収集した資料全てが博覧会に出品されたわけではなく、実際の出品点数は171点（内アイヌ民族資料57点）となっており、実際に出品されたものについては万国博覧会終了後、ほぼ全てがベルリン民族学博物館の収蔵となったと考えられている（三浦 2001：179-190）。

荷縄については、開拓使出品目録に「タレ 荷物ヲ背負フ連尺」、「バツカリタレ 小児ヲ背負フ連尺」、「同荷縄」等の記載があるが、実際に出品された資料と、出品されず日本国内に残された資料の対比は困難な場合が多い。

資料番号25696（表5：1）⁽¹⁰⁾に付されたラベルには、「荷物ヲ脊負ノ連尺」（表面）、「積丹郡 六十号」（裏面）

の記載があり、開拓使出品目録にある資料名及び収集地と一致していることから、両者は同一のものを指す可能性が高い（表1：1）⁽¹¹⁾。

開拓使による記録『略輯 旧開拓使会計書類 第四号 第三百七十四冊』（簿書6495-44）によれば、1872年5月12日～6月6日にかけて、札幌を出発して余市郡から古平郡にかけての北海道南西部海岸地域で資料収集活動が行われていることから（三浦 2001：186）、積丹郡を収集地とする本資料は、この時に収集されたものと推測される。そこで以下では、収集年として1872年を加えることとする。

資料番号25695（表5：7）は、東博図版目録に、かつて棒が付属したとの記載が存在することから、「バツカリタレ 小児ヲ背負フ連尺」に該当する可能性があるものの、詳細は不明である（表1：2）。

1883年収蔵資料

1883年収蔵資料は、佐々木による概説に加え、北大植物園・博物館の加藤克によって詳細な検討が加えられており、現在の北大植物園・博物館の前身である札幌博物場から1883年9月に送付された経緯が明らかにされている（加藤 2008：47）。

東京国立博物館所蔵資料のうち、「北海道管理局引継品」の記載があるラベルが付属した荷縄は2点確認されており（表2）、資料番号25697について、今回の調査でラベル表に「五号 脊負■」の記載が確認された。これは加藤が紹介した『送付目録』（加藤 2008：表2）の5番と内容が一致しており、両者は同一と見なすことができる。

資料番号25698はラベル表に「廿六号 脊負皮」の記載があるものの、『送付目録』の26は矢筒であり、一致

表1 『澳国博覧会出品目録 八 北海道 開拓使ヨリ差送ノ品』および『第十一区列品目録』掲載品目と東京国立博物館所蔵資料の対応関係

	資料名	収集地	点数	ラベル（表）	ラベル（裏）	現行資料番号	備考	第十一区列品目録
1	タレ 荷物ヲ背負フ連尺	積丹郡	1	荷物ヲ背負ノ連尺	積丹郡六十号	25696	ラベル裏面の「六十号」は加筆か積丹郡での収集は、明治5年5～6月に実施された可能性が高い*	タラ アツシ製 後志国積丹
2	バツカリタレ 小児ヲ背負フ連尺	古平郡	1			25695カ	『東京国立博物館図版目録アイヌ民族資料篇』によれば、記載簿に「棒壺本付添、長壹尺参寸、徑壹寸」の記載があることから、子負縄であった可能性が考えられる	タラ 棒附キ、葡萄蔓皮ニテ製ス

表2 札幌博物場からの『送付目録』（蝦夷之部）および『第十一区列品目録』掲載品目と東京国立博物館所蔵資料の対応関係

目録	資料名	収集地	点数	ラベル（表）	ラベル（裏）	現行資料番号	備考	第十一区列品目録
5	脊負縄	北海道カ	1線	北海道管理局引継品 五号 脊負■ 明治■■■■月	五	25697		
28	脊負皮	北海道カ	1筋	北海道管理局引継品 廿六号 脊負皮 十六年十月		25698カ	ラベル表面の番号はやや文字が乱れ、書き直しの可能性がある ラベル裏面には二種の切手状シールが重ねて貼付されている	タラ 毛皮製

(10) 東博図版目録（東京国立博物館編 1992）では25694と25696の写真が取り違えられている。本稿では資料に付されたラベルに従った。

(11) 裏面の「六十号」は字体が異なり、中央に書かれた「積丹郡」の横に付記されていることから、後に追記された可能性がある。

しない。むしろ、名称が一致する『送付目録』28に該当する可能性が考えられるが、確実ではない⁽¹²⁾。

『第十一区列品目録』（佐々木1997）

佐々木が紹介した簿冊『第十一区列品目録 北海道』は、1900年から1923年の間に作成された準備稿と見なされており（佐々木 1997：12）、資料の出入りが無ければ、そこに記載された資料は上述した資料群と一致しているものと考えられる。「タラ」という名称の資料は6点記載されており、現在、東博図版目録で1875年・1883年所蔵とされる資料点数の総計と点数は等しい。そこで、資料の特徴から、記載内容と類似したものを表に書き加えた（表1・表2）。他に「タラ 同」、「タラ アツシ製」がある。残る25694、25697はいずれも靱衣製で、記載内容におおむね合致している⁽¹³⁾。

1927年収蔵資料

資料番号27895には「銅駄坊」旧蔵のラベルが付属しており、「日高国」とともに「40年」という記載がある。本資料は1927（昭和2）年に東京国立博物館に所蔵されていることから、記載された「40年」は1907（明治40）年に比定される⁽¹⁴⁾。

（2）北大植物園・博物館所蔵資料

所蔵資料には、荷縄として登録されたもの9点のほか、子負棒と組み合わせたもの1点（表5：11）、クマ神用の土産物を束ねたもの1点（表5：15）、矢筒に付属したものの1点（表5：12）の計12点が含まれており、全点の調査を行った⁽¹⁵⁾。

背景情報が明らかな資料は少ないものの、一部の資料（表5：19・20）は1910年に刊行された『札幌博物館案内』（村田編 1910）の記載とおおむね一致することから、1910年以前に収集されたものと考えられる。

（3）市立函館博物館所蔵資料

所蔵資料には12点の荷縄が含まれており、開拓使関連資料などを含む「旧蔵資料」（大矢 2015）と、馬場脩収集資料、1990年代以降に収蔵するところとなった「児玉個人収集資料」（大矢 2017）の三者に含まれる。

1979年刊行の目録では資料番号773～776は採集地な

どのデータが空欄になっているが、その後、大矢京右による対比が公表されており（大矢 2015：図表5）、本稿ではその成果に従った。

馬場脩収集資料については、整理報告書（市立函館博物館 1979a）に記載があるNo.682・No.683が蔵品目録（市立函館博物館 1979b）に掲載の資料番号1012、1013であることが写真を用いて確認される。「児玉個人収集資料」（大矢 2017）に含まれる2点については、いずれも背景情報は付属していない。

（4）国立民族学博物館所蔵資料

所蔵資料には31点の荷縄が含まれており、展示中などの2点を除く29点について調査を実施した。

資料は鳥居龍蔵による1899年の千島列島調査を含む東京大学理学部旧蔵資料や、知里真志保の寄贈品を含む「アチックミュージアム」旧蔵資料など希少なものを含むほか、1970～90年代に北海道で収集された資料も多数含まれる。

（5）北海道博物館所蔵資料

概要

所蔵資料には68点の荷縄が含まれており、2017年10月までに確認された65点について調査を実施した⁽¹⁶⁾。なお、北海道博物館の前身である北海道開拓記念館が発行した資料分類目録『民族Ⅰ』（北海道開拓記念館 1981）では、荷縄は「荷縄」と「死者用荷縄」に区別されているが、本稿では両者の区分そのものが検証の対象となるため、分析に当たっては一括して扱った。

資料の収蔵に至る経過は、北海道開拓記念館の開館準備に伴う北海道所蔵資料の移管、開館準備中の購入・寄贈・寄託、開館後の寄贈などを含む。

旧拓殖館資料

1918年に開催された開道五十周年記念北海道博覧会の展示資料を中心とすると考えられているもので、荷縄は資料番号11288～11290の3点が含まれている。1960年代後半に北海道庁文書課から北海道百年記念館事務局に引き継がれた経緯などについては、山田伸一が詳細に検討している（山田 2000）。

1934年にまとめられた『北海道拓殖館案内』には、

(12) 資料番号25698は、極めて類似した資料が北大植物園・博物館に残されており（表5：20）、収集地は「サハリン」とされている。仮に資料番号25698が『送付目録』28に該当すると考えた場合、「樺太之部」ではなく「蝦夷之部」に記載されているため、よく似た資料がサハリンと北海道でそれぞれ収集されたと考えことになる。

(13) ただし、素材の種については一致しない可能性が高い。一例を挙げれば、25695は『第十一区列品目録』で「葡萄蔓皮」とされるものに該当する可能性があるものの、肉眼観察ではシナノキ樹皮を素材としているものと推測される。

(14) 図録を編集した佐々木利和からの個人的教示によれば、その他の「北海道」などの記載には、台帳掲載順等を根拠とした推定が含まれる。

(15) 表5：15は展示中のため、一部の計測を実施しなかった。

(16) 北海道博物館所蔵の民族資料については、現在、所在確認と台帳との照合等を進めている。

「アイヌの器物」として「二一、縄」「ハ、タラアツ（荷負縄）3本」（北海道庁産業部 1934：150、山田 2000：191）の記載があり、現在「旧拓殖館資料」に含まれる資料数と一致している⁽¹⁷⁾。

N.G.マンロー収集資料

1942年に没したマンローの収集資料と考えられているものには、資料番号27136・27146の2点が含まれている。いずれも現在では古いラベル等は付属していないが、1971年の受入当時に作成されたと思われる紙台帳には、27136の備考欄に「死人の荷縄 これで (20) のチタラベを縛って携行する 21.Raikuru-tara ライクルタラ 死人の負縄」の記載がある。これがマンローによる記載を転記したものとすれば、収集時に聞き取られた情報が付加されたものである可能性がある。

その他

1971年に白老町の女性から寄贈された資料番号22181は、1969年に実施された調査の報告に掲載されているものと同一であることが掲載写真（藤村 1976：写真⑤）との照合で確認された。報告の情報によれば、本資料は葬送儀礼用である。同年に新ひだか町静内の女性から一括して受け入れたものが3点ある（表5：69-71）。

資料番号109539は林善茂旧蔵資料で、林の著作「アイヌの収穫・貯蔵技術」（林 1959：第5図）に掲載が確認できることから、1959年以前の情報を追加した。

資料番号114675は旭川市近文に生まれ、苫小牧市に居住した人物が製作・寄贈したもので、収集地には出身地である旭川市近文を記載した。

資料番号127864は、アイヌ服飾研究者の津田命子が、北大植物園・博物館所蔵資料などをモデルとして製作した製作工程を示す3点のうち完成品1点で、経糸にはラフィアを用いている。

小島慧子による収集資料は、2009年に受け入れた後、整理が終了したもののみを掲載した図録が刊行されているが（北海道開拓記念館 2011）、荷縄については全点が2017年に追加登録されたものに含まれる。近藤幸吉・田中美穂、佐々木金太郎らによる収集資料については以前言及したため、ここでは繰り返さない（大坂 2017：6）。

(6) 旭川市博物館所蔵資料

所蔵資料に含まれる荷縄は14点で、うち12点について調査を実施した。

資料については、これまで目録等が刊行されていないため、北海道教育委員会が実施した民具資料の調査報告を参照し、記載された背景情報に館が所蔵する台帳情報（北海道教育委員会 1977）を照合した上で記載した。

旭川市に住んだ女性が所蔵した資料が4点、深川市に生まれ旭川に住んだ女性が製作した資料が6点含まれている。

(7) 幕別町蝦夷文化考古館所蔵資料

所蔵資料は幕別町白人に生まれ、地区の生活改善等につとめた吉田菊太郎（1896年生～1965年没）が収集した資料が大部分を占めており、荷縄2点についても同地で収集されたことが明らかにされている（幕別町教育委員会 1992）。

(8) 二風谷アイヌ文化博物館所蔵資料

所蔵資料のうち、萱野茂収集資料4点、妻沼浩史収集資料9点の計13点を対象とした。それぞれのコレクションの形成過程については前稿（大坂 2017：6）で述べたので、そちらを参照して頂きたい。

(9) 新ひだか町アイヌ民俗資料館所蔵資料

所蔵資料のうち、新ひだか町静内に居住した男性から2006年に寄贈された資料10点を対象とした。寄贈者は新ひだか町静内に居住していたものの、親族が浦河町にも居住していることから、資料は新ひだか町から浦河に及ぶ地域で製作された可能性を想定しておくこととする。

(10) 浦河町立郷土博物館所蔵資料

1978年の博物館設置に伴い、浦河町内で収集された可能性が想定されるもので、収集の経過などは明らかになっていない。

4 分類

(1) 製作技術の概要

属性の設定に先立って、全体を一体で編み上げる荷縄の製作技術について簡単に触れておく。部位名称は額当て、分岐部、縄部とする（図1）。アイヌ語での部位名称は、平取町ペナコリに生まれた川上まつ子（1912年

(17) ただし、ラベル等を用いて同定されたものではなく、資料の出入りがあったものの結果として点数が一致しているという可能性を否定することはできない。今後、コレクション全体の検討が必要である。

生～1988年没)によるものが記録されており、額当てがtaripe、分岐部がnisipsutu、縄部がtarat、縄部の末端はetupsikeとされている⁽¹⁸⁾。

荷縄の製作工程は、1970年代に新たに構築された技術体系(大坂 2017: 6-8)を除けば、体系的な記録は存在しない。製作過程を示す未製品(大坂 2017: 図3: 4)から判断して、額当てにあたる経糸を最初に準備し、1本ないし2本の経糸固定具に縛り付けて固定した後に額当てを編み始めている。未製品では例外なく経糸の両側が撚りをかけない繊維の状態になっているが、これは縄部の末端に向かって本数や太さを減らす必要があるため、あらかじめ撚りをかけておくことができないためと考えられる。

(2) 地域差・年代差に関する属性の設定

属性は、地域差、年代差を反映する可能性がある属性を抽出して設定する。

構成

I 一体

額当てから縄部までが一体となるもの。

II 分離

額当てに、別に用意された縄部を取りつけるもの。

緯糸の編みの技法

額当ての製作技法は、製作技術が共通する刀帯・死者用靴⁽¹⁹⁾の分類にあたって設定したものを基本的に踏襲する。

技法A1

前稿で示した定義を踏襲する。緯糸の交差方向によって編み目の傾きが変異するが、本稿の分析対象資料では、緯糸に木綿糸を用いるものでは編み目は例外なく右下がりとなる一方(図5: 1-3)、木綿布を用いるものの中には右上がりとなるものも1例存在する(図5: 4)。

技法B1・B2

前稿で示した定義を踏襲する。一部の資料では、端部のみ技法B1、その他を技法B2で編むものがあるが(図6: 3・4)、これらは属性集計の際には技法B2として扱った。技法B1では緯糸の交差方向によって編み目の傾きが変異するが、本稿の分析対象資料では編み目は例

外なく右下がりとなる。端部の処理等に小変異が見られる(図6: 1・2)。

技法G

経糸と緯糸の交差構造が「タテ・ヨコ直交型」(吉本編 2013: 19)をなす点で技法C・技法Eと共通するものの、裂いた靱皮を撚りをかけずに素材としたもの。東京国立博物館所蔵資料1点が該当する(図7)。

額当て緯糸素材

緯糸素材は以下の1～4に分類する。それぞれの細かな特徴は備考欄に示すこととした。

表3 素材の組み合わせによる分類項目の設定

属性名称	素材
1	靱皮糸
2	靱皮糸+木綿糸
3	木綿糸
4	木綿布

分岐部の形態(図8)

形態から次の5種に分類する。「5本」および「1本」は例外的なため、図を省略した。

5本

額当ての経糸を分岐部で5分割して編むもの。1点のみ。

4本

額当ての経糸を分岐部で4分割して編むもの。経糸36本の場合、分割する際の本数の組み合わせには[9/9/9/9]・[10/8/8/10](図8: 1)・[12/6/6/12](図8: 2)など、いくつかの変異がある。

3本

額当ての経糸を分岐部で3分割して編むもの。経糸36本の場合、[12/12/12]とする場合が多く、28本の場合には[10/8/10]などの分割が見られる。

Y字

額当ての経糸を4本に分割したのち、中央の2本を1本にまとめるもの。

1本

分岐部が存在せず、額当てから直接、縄部に移行する

(18) 一般財団法人アイヌ民族博物館アイヌ語アーカイブ34604BP「川上まつ子の伝承 信仰(お産)」による。taripeは[tar-ipe]でipeは「中身」(田村 1996: 238)、taratは[tar-at]でatは「ひも」(田村 1996: 31)、etupsikeは「その先端」(田村 1996: 137)を意味する。nisipsutuについては、管見の限り他に記録がない。taripeは十勝本別方言(北海道教育委員会 1988: 116)、静内方言(北海道教育委員会 1984: 66)で同様の語形が記録されている。日高町門別の鍋澤元蔵が語った神謡には、taratの所属形taraciを含むtaraci takne tar〔荷縄の縄-短い-荷縄〕、taraci tanne tar〔荷縄の縄-長い-荷縄〕という語彙が含まれている。

(19) 本書掲載「北海道アイヌの死者用靴」



1 (北大植物園・博物館 106)



2 (北大植物園・博物館 187)



3 (市立函館博物館 民族 774)



4 (北海道博物館 126563)

図5 技法A1のバリエーション



1 技法 B1 (市立函館博物館 民族 775)



2 技法 B1 (市立函館博物館 民族 773)



3 技法 B2 (国立民族学博物館 H90743)



4 技法 B2 (国立民族学博物館 H90744)

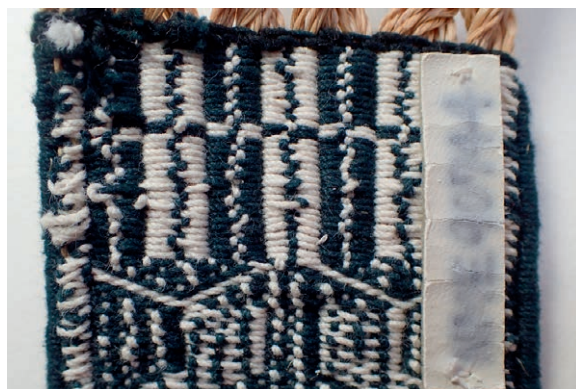


図6 技法B1・B2のバリエーション



1 (東京国立博物館 26695)



図7 技法G



1 分岐部 4 本 (旭川市博物館 7422)



2 分岐部 4 本 (北大植物園・博物館 32934)



3 分岐部 3 本 (北海道博物館 23084)



4 分岐部 3 本 (北海道博物館 182482)



5 分岐部 Y 字 (旭川市博物館 7423)



6 分岐部 Y 字 (旭川市博物館 627)

図8 分岐部の例

もの。

アイヌ民族の組紐の製作については、平取町二風谷での8本編み⁽²⁰⁾の技法が記録されているほか（萩中・河野1967）、津田が復元的な研究を通じていくつかの例を示している（津田 2003）。分岐部から縄部に用いられる編みの技法について、今回の検討で認められたバリエーションはかなり多い。1本ごとに編む場合、ある糸を基準として、その他の糸に対する「またぎ」と「もぐり」の数を[単位となる糸の本数-またぐ本数／もぐる本数・・・]の形式で表示すると、表4のようになる。その他、稀にあらかじめ2本をより合わせて本数を減らしてから編んだ事例もある（図8：4）。

表4 編みのバリエーション

種別	組み合わせ
6本編み	[1-1/3/1] ※ [1-2/3]
8本編み	[1-2/3/2]
9本編み	[1-2/4/2] ※ [1-2/1/1/2/2]
10本編み	[1-2/1/1/1/1/2] [1-2/2/1/2/2] [1-3/3/3] ※ [1-2/1/1/3/2]
12本編み	[1-3/2/1/2/3] [1-2/2/3/2/2]
15本編み	[1-2/2/2/2/2/2/2]

※編みが不安定なもの

こうした編みの差違は、何らかの形で地域差や年代差を示す可能性があるが、編みが強固な場合には本数の確認そのものが困難なため、全ての資料について記載するのは現実的ではないため、この種の編みを組み込んだ立ち入った分類は控えた。

(3) 分類群の設定

本論で検討した属性の組み合わせによる分類をまとめると、以下ようになる（表5）。分析対象資料171点のうち、額当てと縄部が一体型のⅠ類が164点（95.9%）、別作りのⅡ類が7点（4.1%）となり、Ⅰ類が圧倒的に多い。

Ⅰ類については、額当ての製作技術と素材から以下の11の細分を設定する。該当する資料の点数と、Ⅰ類に占める比率を併せて示す。

■ Ⅰa1類（図9：1）

額当ての編みが技法A1で、額当て緯糸素材が靱皮のもの。Ⅰ類のうち22点（13.4%）が該当する。

■ Ⅰa2類（図9：2）

額当ての編みが技法A1で、額当て緯糸素材が靱皮と木綿糸のもの。Ⅰ類のうち2点（1.2%）が該当する。

■ Ⅰa3類（図9：3）

額当ての編みが技法A1で、額当て緯糸素材が木綿糸のもの。Ⅰ類のうち5点（3.0%）が該当する。

■ Ⅰa4類（図9：4）

額当ての編みが技法A1で、額当て緯糸素材が木綿布のもの。Ⅰ類のうち8点（4.9%）が該当する。

■ Ⅰb1類（図9：5）

額当ての編みが技法B1で、額当て緯糸素材が靱皮のもの。Ⅰ類のうち3点（1.8%）が該当する。

■ Ⅰb2類（図9：6）

額当ての編みが技法B1で、額当て緯糸素材が靱皮と木綿糸のもの。Ⅰ類のうち7点（4.3%）が該当する。

■ Ⅰb3類（図9：7・8）

額当ての編みが技法B1で、額当て緯糸素材が木綿糸のもの。Ⅰ類のうち97点（59.1%）が該当する。

■ Ⅰc1類

額当ての編みが技法Cで、額当て緯糸素材が靱皮のもの。Ⅰ類のうち1点（0.6%）が該当する。

■ Ⅰd1類（図10：1）

額当ての編みが技法A'1で、額当て緯糸素材が靱皮のもの。Ⅰ類のうち9点（5.5%）が該当する。

■ Ⅰe1類

額当ての編みが技法Gで、額当て緯糸素材が靱皮のもの。Ⅰ類のうち1点（0.6%）が該当する。

■ Ⅰf3類（図10：2）

額当ての編みが技法B2で、額当て緯糸素材が木綿糸のもの。Ⅰ類のうち9点（5.5%）が該当する。

(20) 本文ではR6本。

表5 属性分析表 (1)

	収蔵機関	分類	資料番号	収集地	製作者	所蔵者	収集年	収蔵年	構成		編み						額当て綿糸素材			
									一体	分離	A1	B1	C	A'1	G	B2	鞆皮	鞆皮+木綿	木綿	木綿布
									I	II	a	b	c	d	e	f	1	2	3	4
1	東京国立博物館	I b3類	25696	積丹郡			1872年	1875年	○			○							○	
2			25697					1927年	○			○							○	
3			27895	日高			1907年	1927年	○			○							○	
4			27896					1927年	○			○							○	
5			27897					1927年	○			○							○	
6		I d1類	25694					1875年	○					○			○			
7		I e1類	25695					1875年	○						○		○			
8		II類	25698					1883年		○	-						-			
9	北大植物園・博物館	I a1類	106	石狩				1879年	○		○						○			
10			153						○		○						○			
11			187						○		○						○			
12			11099						○		○						○			
13		I a3類	10989						○		○								○	
14		I b2類	10990	千歳			明治期		○			○						○		
15		I b3類	9842						○			○							○	
16			10233						○			○							○	
17			10645						○			○							○	
18			32934						○			○							○	
19		II類	190	色丹島			1910年以前			○	-						-			
20			191	サハリン			1910年以前			○	-						-			
21	市立函館博物館	I a1類	民族774	胆振			1881年以前	1956年	○		○						○			
22		I a2類	民族778						○		○							○		
23			民族1012	白老町			1930～1940年代	1971年	○		○							○		
24		I b3類	民族773	胆振			1881年以前	1956年	○			○							○	
25			民族775	胆振			1881年以前	1956年	○			○							○	
26			民族776	日高			1879年以前	1956年	○			○							○	
27			民族780						○			○							○	
28			民族1011	白老町			1930～1940年代	1971年	○			○							○	
29			H10-51-08-02				1929～1970年	1998年	○			○							○	
30			H10-51-29-19				1929～1970年	1998年	○			○							○	
31		I d1類	民族777						○					○			○			
32			民族779						○					○			○			
33	国立民族学博物館	I a1類	H0122175					1984年	○		○						○			
34		I a4類	H0025158	平取町二風谷	N.T	二谷国松	1953年	1975年	○		○									○
35		I b3類	K0005184					1975年	○			○							○	
36			K0002123	北海道			1903年以前	1975年	○			○							○	
37			K0002260	北海道				1975年	○										○	
38			K0002261	北海道				1975年	○			○							○	
39			K0002273	札幌市				1975年	○			○							○	
40			H0003165					1976年	○			○							○	
41			H0003166					1976年	○			○							○	
42			H0011064	平取町			1935年	1977年	○			○							○	
43			H0017047	登別市	金成モナシノウク		1935年	1975年	○			○							○	
44			H0025102	厚真町			1952年	1975年	○			○							○	
45			H0033609	鶴居村		八重九郎		1978年	○			○							○	
46			H0033610	鶴居村		八重九郎		1978年	○			○							○	
47			H0062310	旭川市	S.K?	S.M		1978年	○										○	
48			H0065055				1970～1978年	1979年	○			○							○	
49			H0065056				1970～1978年	1979年	○			○							○	
50			H0065057				1970～1978年	1979年	○			○							○	
51		I d1類	H0062312	旭川市	S.K?	S.M		1978年	○				○				○			
52		I f3類	H0090742	平取町二風谷				1981年	○							○			○	
53			H0090743	平取町二風谷				1981年	○							○			○	
54			H0090744	平取町二風谷				1981年	○							○			○	
55			H0158321	平取町二風谷				1988年	○							○			○	
56			H0189046	浦河町	浦河タレ?	浦川太八		1993年	○							○			○	
57			H0189047	浦河町	浦河タレ?	浦川太八		1993年	○							○			○	
58			H0189051	浦河町	浦河タレ?	浦川太八		1993年	○							○			○	
59			K0002126	根室			1903年以前	1975年		○	-						-			
60		II類	K0002313	色丹島			1899年	1975年		○	-						-			
61			K0002339	色丹島			1899年	1975年		○	-						-			

分岐部					額当て		縄長さ (cm)	経糸切断	使用痕	経糸本数	備考
5本	4本	3本	Y字	1本	縦 (mm)	横 (mm)					
	○				68	164	143		○	32	額当て緯糸：紺木綿+白木綿、東博図版目録写真とは25694と取り違い
	○				88	153	190			36	額当て緯糸：黒木綿+白木綿
	○				82	152	—		○	38	額当て緯糸：紺木綿+白木綿、縄部欠損、タグに「北海道日高國アイヌ使用／四十年八月二十二日」などの記載
	○				74	116	245.5			36	額当て緯糸：紺木綿+白木綿
		○			62	118	153.5			36	額当て緯糸：紺木綿+白木綿
○					105	169	186.5			34	額当て緯糸：靱皮、額当てタテ糸は靱皮（樹木内皮）を裂いたものを縫りをかけずに使用、東博図版目録写真は25696と取り違い
		○			103	213	142			—	額当て：経糸・緯糸とも樹木内皮を裂いたもの、額当ては布に覆われており経糸の計数不可
—					71	460	199			—	北大植物園・博物館191に酷似
		○			86	195	207			26	額当て緯糸：イラクサ、色調の異なる繊維で左右を編み分ける
	○				71	150	227.5			24	額当て緯糸：イラクサ
	○				89	144	140			28	額当て緯糸：軽く縫りをかけた靱皮繊維、子負棒と組み
	○				39	99	—		○	26	額当て緯糸：炭化物の付着が著しく素材不明、矢筒との結東部で断裂しているため縄長さ不明
	○				82	152	—			28	額当て緯糸：黒木綿+白木綿、縄欠損
		○			55	96	—			42	額当て緯糸：紺木綿+白木綿、縄部欠損、タグに「葬儀用」の記載、『札幌博物館案内』宗教的用品14号と推定
		○			58	99	—			28	クマ神用土座に付属、展示中のため縄長さの計測不可
	○				88	156	243.5			36	額当て緯糸：紺木綿+白木綿、虫損が激しい
		○			54	76	123.5			36	額当て緯糸：黒木綿+白木綿、タグに「葬儀用」の記載
	○				86	148	182.5			36	額当て緯糸：黒木綿+白木綿、北海道博物館33293に酷似
—					102	460	258			—	額あては布に覆われており経糸の計数不能、経糸に動物の腱、緯糸に木綿糸とハマニシクを併用した編み物を、獣皮でまとめる、『札幌博物館案内』日用器具及楽器61号と推定
—					79	490	174			—	額当て：獣皮、『札幌博物館案内』日用器具及楽器62号と推定、東京国立博物館25698に酷似
	○				71	137	198.5			28	額当て緯糸：黒染靱皮+靱皮
		○			80	134	137.5			22	額当て緯糸：イラクサ？＋一部に黒染靱皮
		○			85	156	—		○	32	額当て緯糸：黒木綿+白木綿+靱皮、縄欠損
	○				102	166	181		○	36	額当て緯糸：黒木綿+白木綿、分岐部の端部から素材が変わり補修の可能性がある
	○				85	194	177		○	36	額当て緯糸：黒木綿+白木綿、分岐部の端部から素材が変わり補修の可能性がある
	○				64	115	148.5			36	額当て緯糸：紺木綿+白木綿、子負棒と組み
	○				110	162	—		○	36	額当て緯糸：紺木綿+白木綿、子負棒と組み
	○				84	156	245		○	36	額当て緯糸：黒木綿+白木綿
	○				79	155	221			36	額当て緯糸：黒木綿+白木綿
		○			56	77	162			28	額当て緯糸：黒木綿+白木綿
		○			92	201	138.5		—	—	額当て緯糸：靱皮、経糸は樹木内皮を裂いたもの、額当てが布に覆われており経糸の計数不可、子負棒と組み
		○			82	185	175.5			14	額当て緯糸：靱皮、経糸は樹木内皮を裂いたもの、子負棒と組み
	○				98	155	180.5			30	額当て緯糸：靱皮
		○			74	170	186			22	額当て緯糸：黒木綿布+白木綿布、台帳に「製作年月昭二八年」の記載
		○			61	122	—			26	額当て緯糸：紺木綿+白木綿、虫損激しい
		○			61	122	—			26	額当て緯糸：紺木綿+白木綿、大阪開設博覧會館興人類館、虫損激しい
	○				85	165	245.5			36	額当て緯糸：紺木綿+白木綿
	○				93	170	205.5			30	額当て緯糸：紺木綿+水色木綿+白木綿
	○				95	195	251		○	36	額当て緯糸：紺木綿+水色木綿+白木綿、長谷部言人監修・東京人類学会編1939『内外土俗品図集』9輯／図版134-732
	○				61	110	132			36	額当て緯糸：紺木綿+白木綿
	○				78	151	225.5			36	額当て緯糸：紺木綿+白木綿
	○				104	235	175.5		○	36	額当て緯糸：紺木綿+白木綿
		○			59	115	137.5			28	額当て緯糸：黒木綿+白木綿、台帳に「標準名 副葬用荷負縄 地方名shiyampap-tar」『一般にボンタラ（小荷縄）の名で呼ばれる』の記載、久保寺1956aに掲載
		○			52	111	119.5			24	額当て緯糸：黒木綿+白木綿、台帳に「製作者 トニカ（ハ○才過ぎの婆）／子供を負う紐」の記載
				○	27	445	232		○	14	額当て緯糸：黒木綿+白木綿
				○	28	530	211		○	14	額当て緯糸：黒木綿+白木綿
	○				64	185	145.5			34	額当て緯糸：黒木綿+白木綿
		○			82	121	179.5			36	額当て緯糸：黒木綿+白木綿
		○			58	104	162			30	額当て緯糸：黒木綿+白木綿
		○			51	98	170.5			28	額当て緯糸：黒木綿+白木綿
			○		100	245	195.5			26	額当て緯糸：靱皮、経糸は樹木内皮を裂いたもの
	○				79	153	272			36	額当て緯糸：黒木綿+白木綿
	○				72	153	275.5			36	額当て緯糸：黒木綿+白木綿
		○			60	112	143			36	額当て緯糸：黒木綿+白木綿
	○				66	138	270			36	額当て緯糸：黒木綿+白木綿
		○			57	168	145.5			22	額当て緯糸：黒木綿+白木綿、経糸はガマの葉の端部
		○			68	174	151			26	額当て緯糸：黒木綿+白木綿、経糸はガマの葉の端部
		○			59	163	147			32	額当て緯糸：黒木綿+白木綿、経糸は麻
—					48	355	224	—	—	—	大阪博覧會人類館寄贈、長谷部言人監修・東京人類学会編1939『内外土俗品図集』9輯／図版134-734、坪井正五郎は1888年に根室訪問
—					80	540	99		○	—	鳥居龍蔵収集
—					62	360	—		○	—	鳥居龍蔵収集

表5 属性分析表 (2)

	収蔵機関	分類	資料番号	収集地	製作者	所蔵者	収集年	収蔵年	構成		編み						額当て綿糸素材			
									一体	分離	A1	B1	C	A'1	G	B2	鞆皮	鞆皮+木綿	木綿	木綿布
									I	II	a	b	c	d	e	f	1	2	3	4
62	北海道博物館	I a1類	109539				～1959年	1985年	○		○						○			
63			8357	平取町二風谷			1964～1969年	1969年	○		○						○			
64			8358	平取町二風谷			1964～1969年	1969年	○		○						○			
65			8447	平取町二風谷			1964～1969年	1969年	○		○						○			
66		I a3類	11288				～1934年カ	1970年	○		○								○	
67		I a4類	8359	平取町二風谷			1964～1969年	1969年	○		○									○
68		I b3類	22181	白老町		T.A		1971年	○			○							○	
69			23354	新ひだか町東静内		T.T		1971年	○			○							○	
70			23355	新ひだか町東静内		T.T		1971年	○			○							○	
71			23356	新ひだか町東静内		T.T		1971年	○			○							○	
72			27136				～1942年	1971年	○			○							○	
73			27146				～1942年	1971年	○			○							○	
74			114675	旭川市近文	S.K			1986年	○			○							○	
75			127864	札幌市	津田命子			1994年	○			○							○	
76			124722				～1940年	1991年	○			○							○	
77			11289				～1934年カ	1970年	○			○							○	
78			11290				～1934年カ	1970年	○			○							○	
79		近藤幸吉	23081-1					1971年	○		○						○			
80			23086					1971年	○		○						○			
81			23092					1971年	○		○						○			
82		I a3類	23094					1971年	○		○								○	
83		I b1類	23084					1971年	○			○					○			
84			23091					1971年	○			○					○			
85		I b2類	23080					1971年	○			○						○		
86			23082					1971年	○			○						○		
87		I b3類	23068					1971年	○			○							○	
88			23069					1971年	○			○							○	
89			23070					1971年	○			○							○	
90			23071					1971年	○			○							○	
91			23072					1971年	○			○							○	
92			23073					1971年	○			○							○	
93			23074					1971年	○			○							○	
94			23075					1971年	○			○							○	
95			23076					1971年	○			○							○	
96			23077					1971年	○			○							○	
97			23078					1971年	○			○							○	
98			23081-2					1971年	○			○							○	
99			23083					1971年	○			○							○	
100			23085					1971年	○			○							○	
101			23087					1971年	○			○							○	
102			23088					1971年	○			○							○	
103			23089					1971年	○			○							○	
104			23090					1971年	○			○							○	
105			23093					1971年	○			○							○	
106		I f3類	23079					1971年	○							○			○	
107		田中美穂	33122					1972年	○			○							○	
108			33123					1972年	○			○							○	
109			33124					1972年	○			○							○	
110		I b3類	33293					1972年	○			○							○	
111		II類	33294					1972年		○	-						-			
112		I a1類	126559				～1983年	1993年	○		○						○			
113		観光物産公社	126563				～1983年	1993年	○		○									○
114			126564				～1983年	1993年	○		○									○
115	小嶋慧子	I a1類	182479					2009年	○		○						○			
116			182480					2009年	○		○						○			
117			182481					2009年	○		○						○			
118			182487					2009年	○		○						○			
119		I a3類	182486					2009年	○		○								○	
120		I b1類	182489					2009年	○			○					○			
121		I b3類	182482					2009年	○			○							○	
122			182483					2009年	○			○							○	
123			182484					2009年	○			○							○	
124			182485					2009年	○			○							○	
125			182488					2009年	○			○							○	
126			182490					2009年	○			○							○	

分岐部					額当て		縄長さ (cm)	経糸切断	使用痕	経糸本数	備考
5本	4本	3本	Y字	1本	縦 (mm)	横 (mm)					
	○				105	145	179.5			30	額当て緯糸：靱皮+端部のみ黒木綿糸、林1959掲載資料
		○			44	165	94			18	額当て緯糸：黒染麻+赤染麻、経糸は麻、映画「ユーカラの世界」撮影用小道具
		○			43	164	89.5			18	額当て緯糸：黒染麻+赤染麻、経糸は麻、映画「ユーカラの世界」撮影用小道具
		○			47	165	104			18	額当て緯糸：黒染麻+赤染麻、経糸は麻、映画「ユーカラの世界」撮影用小道具
	○				55	150	198			14	額当て緯糸：黒木綿+白木綿、額宛の両端はA'1の部分がある、経糸は樹木内皮を裂いたもの
	○				95	155	246.5		○	24	額当て緯糸：赤木綿布+白木綿布、映画「ユーカラの世界」撮影用小道具
		○			61	123	153			36	額当て緯糸：紺木綿+白木綿、台帳に「死者用」の記載、藤村1976写真⑤
		○			61	96	148	○		36	額当て緯糸：黒木綿+白木綿、経糸切断9本、23355に酷似
		○			65	112	190	○		36	額当て緯糸：黒木綿+白木綿、経糸切断本数不明、23354に酷似
	○				88	150	281		○	36	額当て緯糸：黒木綿+白木綿
		○			52	101	153			36	額当て緯糸：黒木綿+白木綿、経糸はシナか、紙台帳に「荷札 死人の負縄 これで20のチカラを縛って携行する」の記載があるが荷札は所在不明
	○				92	166	229.5			36	額当て緯糸：黒木綿+白木綿、経糸はツルウメモドキか
		○			71	194	187			24	額当て緯糸：黒木綿+白木綿、経糸麻
	○				81	150	286			36	額当て緯糸：紺木綿+白木綿、経糸：ラフィア、北大植物園・博物館10223模作
	○				82	155	276.5		○	36	額当て緯糸：黒木綿+白木綿
		○			57	92	135			36	額当て緯糸：紺木綿+白木綿
		○			63	129	152.5			36	額当て緯糸：黒木綿+白木綿
		○			63	122	200			20	額当て緯糸：靱皮、23086に酷似
		○			58	113	179			20	額当て緯糸：靱皮、23081-1に酷似
		○			61	100	186.5			26	額当て緯糸：靱皮
		○			55	95	152			26	額当て緯糸：黒木綿+褐色木綿
		○			62	104	126.5	○		28	額当て緯糸：黒染靱皮+靱皮、経糸切断4本
	○				52	108	106			36	額当て緯糸：黒染靱皮+靱皮
		○			61	88	126			36	額当て緯糸：紺木綿+靱皮
		○			47	90	148			28	額当て緯糸：紺木綿+靱皮
		○			47	90	181			20	額当て緯糸：紺木綿+白木綿、付属タグと台帳写真が23077と取り違い
		○			60	80	144.5	○		28	額当て緯糸：紺木綿+白木綿
		○			53	89	163.5	○		28	額当て緯糸：黒木綿+白木綿
		○			65	97	162	○		28	額当て緯糸：黒木綿+白木綿
	○				68	109	182			36	額当て緯糸：黒木綿+白木綿
	○				68	128	175.5		○	36	額当て緯糸：黒木綿+白木綿
	○				73	140	220			28	額当て緯糸：黒木綿+白木綿+赤木綿
		○			52	88	100			24	額当て緯糸：紫木綿+白木綿
	○				59	78	155			28	額当て緯糸：黒木綿+白木綿
		○			51	105	134.5			28	額当て緯糸：黒木綿+白木綿、付属タグと台帳写真が23069と取り違い
		○			61	113	165			28	額当て緯糸：黒木綿+白木綿
		○			70	89	181	○		36	額当て緯糸：紫木綿+白木綿、経糸切断6本
		○			78	111	121	○		36	額当て緯糸：紫木綿+白木綿、経糸切断6本
		○			64	95	158			36	額当て緯糸：黒木綿+白木綿
		○			67	122	124	○		36	額当て緯糸：黒木綿+白木綿、経糸切断2本
	○				69	115	178			36	額当て緯糸：黒木綿+白木綿
	○				62	111	116.5			36	額当て緯糸：黒木綿+白木綿
		○			48	98	168			28	額当て緯糸：黒木綿+白木綿
		○			64	120	163			36	額当て緯糸：黒木綿+白木綿
		○			68	121	219	○		28	額当て緯糸：黒木綿+白木綿、経糸は麻
		○			67	111	135	○		36	額当て緯糸：黒木綿+白木綿、経糸切断8本、33124に酷似
		○			74	152	131			32	額当て緯糸：黒木綿+白木綿
		○			73	110	108	○		36	額当て緯糸：黒木綿+白木綿、経糸切断8本、33122に酷似
	○				81	152	—			36	額当て緯糸：黒木綿+白木綿、北大植物園・博物館32934に酷似
—							—				額当て素材：獣皮
		○			61	89	92			22	額当て緯糸：黒染靱皮（麻）+靱皮（麻）
		○			89	180	255		○	24	額当て緯糸：赤木綿布+白木綿布、経糸の一部にビニール紐
		○			87	158	205			22	額当て緯糸：赤木綿布+白木綿布、経糸の一部にビニール紐
		○			52	133	184.5	○		16	額当て緯糸：黒染靱皮+靱皮
		○			54	97	150			21	額当て緯糸：黒染靱皮+靱皮
		○			68	88	176			17	額当て緯糸：黒染靱皮+靱皮
	○				96	176	298		○	28	額当て緯糸：靱皮+端部の一部に黒染靱皮
	○				57	131	118			24	額当て緯糸：黒木綿+白木綿
	○				86	171	116			36	額当て緯糸：黒染靱皮+靱皮
		○			66	123	122			36	額当て緯糸：黒木綿+白木綿
	○				51	103	114			36	額当て緯糸：黒木綿+白木綿
		○			58	106	117			28	額当て緯糸：紺木綿+白木綿
		○			72	104	171	○		36	額当て緯糸：黒木綿+白木綿、経糸切断本数不明
	○				78	137	240.5			36	額当て緯糸：紺木綿+靱皮（麻）、縦糸は麻
	○				81	150	286			36	額当て緯糸：黒木綿+白木綿

表5 属性分析表 (3)

	収蔵機関	分類	資料番号	収集地	製作者	所蔵者	収集年	収蔵年	構成		編み						額当て綿糸素材			
									一体 分離		A1	B1	C	A'1	G	B2	鞆皮	鞆皮+木綿	木綿	木綿布
									I	II	a	b	c	d	e	f	1	2	3	4
127	旭川市博物館	I a1類	5797					1972年	○		○						○			
128		I b2類	5795					1972年	○			○						○		
129		I b3類	644					1952年	○			○							○	
130			7675						○			○							○	
131			5794					1972年	○			○							○	
132			5796					1972年	○			○							○	
133			5798					1972年	○			○							○	
134			7097	旭川市 (深川)		S.K		1970年	○			○							○	
135			7394	旭川市 (深川)		S.K		1970年	○			○							○	
136			7422	旭川市 (深川)		S.K		1970年	○			○							○	
137			7423	旭川市 (深川)		S.K		1970年	○			○							○	
138			7424	旭川市 (深川)		S.K		1970年	○			○							○	
139			7445	旭川市 (深川)		S.K		1970年	○			○							○	
140		I c1類	5799					1972年	○				○						○	
141		I d1類	626	旭川市		M.H		1953年	○					○			○			
142			627	旭川市		M.H		1953年	○					○			○			
143			641	旭川市		M.H		1953年	○					○			○			
144			642	旭川市		M.H		1953年	○					○			○			
145			5793					1972年	○					○			○			
146	幕別町蝦夷文化考古館	I a3類	527	幕別町白人		T.S	1930～1965年	1965年	○		○								○	
147		I b3類	528	幕別町白人		H.K	1930～1965年	1965年	○			○							○	
148	二風谷アイヌ文化博物館	I a1類	NAH-M-19910487					1992年	○		○						○			
149		I a4類	NAH-M-19910485					1992年	○		○									○
150			NAH-M-19910490					1992年	○		○									○
151			NAH-M-19910493					1992年	○		○									○
152			KT165					1997年	○		○									○
153		I b2類	KT187					1997年	○			○						○		
154		I b3類	KT185					1997年	○			○							○	
155			KT186					1997年	○			○							○	
156			KT188					1997年	○			○							○	
157			KT189					1997年	○			○							○	
158			KT190					1997年	○			○							○	
159			KT192					1997年	○			○							○	
160		I f3類	KT191					1997年	○							○			○	
161	新ひだか町アイヌ民俗資料館	I a1類	10382	新ひだか町静内		U.T		2006年	○		○						○			
162			10384	新ひだか町静内		U.T		2006年	○		○						○			
163		I b2類	10319	新ひだか町静内		U.T		2006年	○			○						○		
164			10380	新ひだか町静内		U.T		2006年	○			○						○		
165		I b3類	10316	新ひだか町静内		U.T		2006年	○			○							○	
166			10317	新ひだか町静内		U.T		2006年	○			○							○	
167			10318	新ひだか町静内		U.T		2006年	○			○							○	
168			10320	新ひだか町静内		U.T		2006年	○			○							○	
169			10381	新ひだか町静内		U.T		2006年	○			○							○	
170			10383	新ひだか町静内		U.T		2006年	○			○							○	
171	浦河町立郷土博物館	I b3類	614						○			○							○	

分岐部					額当て		縄長さ (cm)	経糸切断	使用痕	経糸本数	備考
5本	4本	3本	Y字	1本	縦 (mm)	横					
	○				92	152	252.5			28	額当て緯糸：黒染鞆皮+鞆皮
		○			69	96	155			36	額当て緯糸：紺木綿+鞆皮（麻？）
			○		54	100	134.5			28	額当て緯糸：黒木綿+白木綿
	○				67	174	238.5			50	額当て緯糸：黒木綿+白木綿、経糸麻？
	○				84	132	210.5		○	36	額当て緯糸：黒木綿+白木綿+赤毛糸？
	○				67	136	246.5		○	36	額当て緯糸：黒木綿+白木綿
	○				54	180	172		○	28	額当て緯糸：黒木綿+白木綿、道教委No.5789
	○				75	201	181			34	額当て緯糸：灰木綿+白木綿、更科『コタン探訪帖』イラストに類似、道教委No.6027
		○			58	104	133.5			34	額当て緯糸：灰木綿+白木綿、道教委No.6038
	○				63	113	183			34	額当て緯糸：灰木綿+白木綿、道教委No.6028
			○		68	146	198			36	額当て緯糸：黒木綿+白木綿、道教委No.6026
	○				67	115	237.5			36	額当て緯糸：黒木綿+白木綿、道教委No.6036
		○			45	87	171.5			20	額当て緯糸：黒木綿+白木綿、道教委No.6037
		○			56	140	79			28	額当て緯糸：白木綿
	○				76	225	157.5			18	額当て緯糸：鞆皮、経糸は樹木内皮を裂いたもの、額あては布で覆われる
			○		118	215	242.5			18	額当て緯糸：鞆皮、経糸は樹木内皮を裂いたもの
			○		110	220	209.5			17	額当て緯糸：鞆皮、経糸は樹木内皮を裂いたもの
			○		123	178	182			26	額当て緯糸：鞆皮、経糸は樹木内皮を裂いたもの
			○		110	215	201			17	額当て緯糸：鞆皮、経糸は樹木内皮を裂いたもの
		○			69	192	302			22	額当て緯糸：黒木綿+白木綿
		○			79	195	259.5	○		34	額当て緯糸：黒木綿+白木綿、経糸切断2本
	○				88	180	241		○	34	額当て緯糸：鞆皮
		○			80	115	187.5		○	20	額当て緯糸：黒木綿布+赤木綿布
		○			98	175	205.5		○	28	額当て緯糸：赤木綿布+黒木綿布
	○				74	153	284		○	24	額当て緯糸：白木綿布+赤木綿布+黒木綿布
		○			90	162	175.5			20	額当て緯糸：赤木綿布+白木綿布
		○			78	110	164.5			26	額当て緯糸：黒染鞆皮+白木綿
	○				78	127	241		○	36	額当て緯糸：紺木綿+白木綿、経糸麻？
	○				81	122	275			36	額当て緯糸：黒木綿+白木綿
	○				61	135	177.5			36	額当て緯糸：黒木綿+白木綿
		○			66	126	142.5			36	額当て緯糸：黒木綿+白木綿
		○			44	120	112.5			28	額当て緯糸：紺木綿+白木綿
		○			63	95	128			36	額当て緯糸：紺木綿+白木綿
		○			53	98	110			28	額当て緯糸：茶木綿+白木綿
	○				69	148	269	○		27	額当て緯糸：鞆皮（麻）
	○				84	153	244			29	額当て緯糸：鞆皮、10383と2本結束した状態で保管
		○			96	96	191.5	○		36	額当て緯糸：黒染鞆皮+白木綿、経糸切断12本、10380と酷似、素材及び文様が同コレクション死者用靴10325と類似
		○			101	100	160	○		36	額当て緯糸：黒染鞆皮+白木綿、経糸切断本数不明、10319と酷似、素材及び文様が同コレクション死者用靴10325と類似
		○			68	110	154.5			28	額当て緯糸：黒木綿+白木綿
		○			73	115	155	○		28	額当て緯糸：黒木綿+白木綿、経糸切断6本、10320と2本結束した状態で保管
		○			69	120	135.5	○		36	額当て緯糸：濃黒木綿+白木綿、経糸切断6本
		○			64	88	136.5	○		36	額当て緯糸：紺木綿+白木綿+端部に黒染鞆皮、経糸切断本数不明、10317と2本結束した状態で保管
	○				80	161	261			36	額当て緯糸：紺木綿+白木綿+赤絹布？、経糸は麻か
	○				83	98	200	○		36	額当て緯糸：黒木綿+白木綿+赤、経糸切断8本？、10384と2本結束した状態で保管
		○			58	90	142			28	額当て緯糸：黒木綿+白木綿

I a1 類



1 胆振／1881 年以前（市立函館博物館 民族 774）

I a2 類



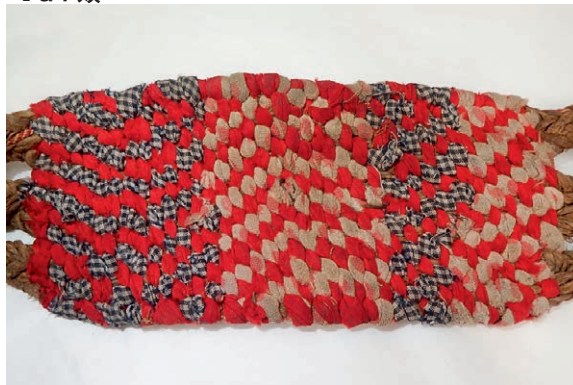
2 白老町／1930～1940 年代（市立函館博物館 民族 1012）

I a3 類



3 収集地／収集年不明（北大植物園・博物館 10989）

I a4 類



4 収集地／収集年不明（北海道博物館 126563）

I b1 類



5 収集地／収集年不明（北海道博物館 23091）

I b2 類



6 収集地／収集年不明（北海道博物館 23082）

I b3 類



7 白老町／1930～1940 年代（市立函館博物館 民族 1011）



8 胆振／1881 年以前（市立函館博物館 民族 775）

図9 荷縄の分類 (1)

I d1 類



1 旭川市／1953 年（旭川市博物館 641）

I f3 類



2 収集地／収集年不明（北海道博物館 23079）

II 類



3 根室／1903 年以前（国立民族学博物館 K0002126）



4 サハリン／1910 年以前（北大植物園・博物館 191）



5 色丹島／1899 年（国立民族学博物館 K0002313）



6 色丹島／1899 年（国立民族学博物館 K0002339）



7 色丹島／1910 年以前（北大植物園・博物館 190）



8 参考資料 色丹島／1899 年（国立民族学博物館 K0002322）

図10 荷縄の分類（2）

5 分類群間の地域差・年代差

本章では、各分類群の分布について検討する。分布の検討にあたっては、背景情報が明らかな資料71点（表6）を対象とし、年代差が混在する可能性を排除するため便宜的に三時期に区分した分布図を提示する（図11）。

(1) I・II類の分布

1870～1940年代には、I類が北海道、II類がサハリン及び千島列島の色丹島に分布しており、比較的明瞭な地域差を示す⁽²¹⁾。北海道東部は資料が欠落しているが、1888年にR.ヒッチコックが網走で撮影した写真（NMNH 28378）でI類を使用する男性が確認されることから⁽²²⁾、I類の分布範囲はオホーツク海沿岸にまで及んでいたものと理解しておきたい。

II類のうち1点（表5：59）は「根室」収集とされているが、根室支庁管内には20世紀初頭の時点で約1000人のアイヌ民族が居住しており、その中には、1884年に北千島から色丹島へ移住させられたクリルアイヌの人々が含まれていたため（北海道庁 1918）、対象資料がどちらの地域集団に由来するものか判断は現状では困難である。

1950年代以降の収集資料にII類が断絶する背景には、II類の主たる製作者であったサハリンアイヌとクリルアイヌがこの間に経験した日本敗戦に伴う北海道以南への移住が関与している可能性も想定される。

(2) I類の地域差

1870～1940年代および1950～70年代には、I類の多くの分類群が北海道南西部に重なって分布している。荷縄は使用による損耗・置換が頻繁になされるものと想定されることから、複数の分類群が同時期に収集されていることは、そのまま複数のバリエーションが同時期に製作されていたことを示す可能性が高い。

そのような中であって、他から比較的確な地域差をなす可能性があるものとして、I d1類が旭川市に集中していることが注目される。この分類群は9点中5点で分岐部がY字になる点でも極めて特徴的で、額当ての製作技術、分岐部の形態の双方について、旭川市周辺に地域差が存在したことを示している。

旭川市で収集されたI b3類の中には、1点ではあるが分岐部がY字のものが含まれている。このI b3類は深川市からの移住者が製作したもので、同じ製作者によるそ

の他の資料では分岐部は4本ないし3本になっている。このような折衷的な資料は、分岐部がY字が支配的な地域において、移住してきた周辺地域出身者が移住先で用いられる属性を受け入れたとことによって製作された可能性も考えられよう。

(3) 変化のプロセス

遺跡出土資料との関係

サハリンと千島列島という離れた地域にII類が分布し、中間の北海道ではI類が分布するに至ったプロセスについては、広い範囲にII類が分布し、後に北海道ではI類が成立したためにII類の分布圏が分断されたという「周囲論」説、利用可能な資源環境の類似に由来してサハリンと千島列島でそれぞれ類似したものが成立・維持されたとする環境要因説など、いくつかの仮説を立てることができる。

仮説を検証する手段としては、遺跡出土品の比較が唯一の方法となるが、これまで得られている確実な資料は千歳市美々8遺跡低湿部のI類（北海道埋蔵文化財センター 1991）1点に留まり、試掘トレンチ出土のため厳密な年代を決定することも難しい。考古資料との連続性の検討は、今後の資料の蓄積を待つほかない。

I a4類の出現

1950～70年代に入ると、それ以前には見られなかったものとして、緯糸に木綿布を用いるI a4類が出現する⁽²³⁾。この分類群は、背景情報が明らかなものは、いずれも日高西部の沙流川流域で収集されている（表5：34・67）。その他と比べて際だって経糸が少なく、裂いた木綿布を用いて太く撚り編み上げる手法は、和人の背負子などに用いられる技術と類似していることから、和人移住者が用いる道具からの技術的影響や、木綿布の大量流通を背景に生じた変化と考えられる。

I f3類の出現

1980～2000年代の資料には、編みの技法B2を用いるI f3類が出現する。明確な背景情報を伴うものではないが、1971年に北海道開拓記念館（当時）に収蔵された資料にも含まれていることから（図10：2）、技法B2の出現は1970年前後に遡る⁽²⁴⁾。

技法B2は、筆者がこれまで実施した刀帯の分析によって既に、1970～80年前後に旭川の一部、浦河町、平取

(21) 類例として、1888年にR.ヒッチコックが色丹から持ち帰った資料が合衆国国立自然史博物館に所蔵されている（NMNH150768）。

(22) 現在、合衆国国立自然史博物館に収蔵されるR.ヒッチコック収集資料には（小谷・萩原編 2004：12）、このとき網走で収集された荷縄が含まれており（NMNH150680）、調査時の記録によればI a1類に該当するものの可能性がある。なお、本資料の情報については古原敏弘氏のご教示を受けた。

(23) 1951年に平取町ペナコリで収集された資料がアメリカ自然史博物館に所蔵されている（AM70.2.0940）。

(24) この資料は経糸に麻紐を用いている点で、同時に収蔵された資料に比べて新しい特徴を示している。

表6 背景情報が明らかな資料一覧

	収集地	収集／収蔵年	収蔵機関	資料番号	分類
1	積丹郡	1872年	東京国立博物館	25696	I b3類
2	石狩	1879年	北大植物園・博物館	106	I a1類
3	色丹島	1899年	国立民族学博物館	K0002313	II類
4	色丹島	1899年	国立民族学博物館	K0002339	II類
5	根室	1903年以前	国立民族学博物館	K0002126	II類
6	白老町	1901年	ペンシルバニア大学考古学人類学博物館	A426B	I c1類
7	白老町	1901年	ペンシルバニア大学考古学人類学博物館	A426A	I b3類
8	白老町	1901年	ペンシルバニア大学考古学人類学博物館	A441	I b3類
9	白老町敷生	1903年	ロシア科学アカデミー人類学民族学博物館 (MAE)	839-22	I b3類
10	日高	1907年	東京国立博物館	27895	I b3類
11	色丹島	1910年以前	北大植物園・博物館	190	II類
12	サハリン	1910年以前	北大植物園・博物館	191	II類
13	千歳市	1910年以前	北大植物園・博物館	10990	I b2類
14	平取町	1912年	ロシア民族学博物館 (REM)	2814-10	I a3類
15	平取町	1912年	ロシア民族学博物館 (REM)	2814-13	I b3類
16	平取町	1912年	ロシア民族学博物館 (REM)	2817-6	I b3類
17	平取町	1912年	ロシア民族学博物館 (REM)	5102-127	I b3類
18	平取町	1912年	ロシア民族学博物館 (REM)	5102-128	I b3類
19	平取町	1912年	ロシア民族学博物館 (REM)	5102-129	I b3類
20	平取町	1912年	ロシア民族学博物館 (REM)	5102-130	I b3類
21	平取町	1912年	ロシア民族学博物館 (REM)	5102-291	I b3類
22	相浜	1912年	ロシア民族学博物館 (REM)	5110-98	II類
23	相浜	1912年	ロシア民族学博物館 (REM)	5110-99/2	II類
24	平取町	1935年	国立民族学博物館	H0011064	I b3類
25	登別市幌別	1935年	国立民族学博物館	H0017047	I b3類
26	白老町	1930-40年代	市立函館博物館	民族1012	I a2類
27	白老町	1930-40年代	市立函館博物館	民族1011	I b3類
28	厚真町	1952年	国立民族学博物館	H0025102	I b3類
29	平取町二風谷	1953年	国立民族学博物館	H0025158	I a4類
30	旭川市	1953年	旭川市博物館	626	I d1類
31	旭川市	1953年	旭川市博物館	627	I d1類
32	旭川市	1953年	旭川市博物館	641	I d1類
33	旭川市	1953年	旭川市博物館	642	I d1類
34	幕別町	1930-65年	幕別町蝦夷文化考古館	527	I a3類
35	幕別町	1930-65年	幕別町蝦夷文化考古館	528	I b3類
36	平取町二風谷	1964-69年	北海道博物館	8357	I a1類
37	平取町二風谷	1964-69年	北海道博物館	8358	I a1類
38	平取町二風谷	1964-69年	北海道博物館	8447	I a1類
39	平取町二風谷	1964-69年	北海道博物館	8359	I a4類
40	白老町	1969年	北海道博物館	22181	I b3類
41	旭川市 (深川)	1970年	旭川市博物館	7097	I b3類
42	旭川市 (深川)	1970年	旭川市博物館	7394	I b3類
43	旭川市 (深川)	1970年	旭川市博物館	7422	I b3類
44	旭川市 (深川)	1970年	旭川市博物館	7423	I b3類
45	旭川市 (深川)	1970年	旭川市博物館	7424	I b3類
46	旭川市 (深川)	1970年	旭川市博物館	7425	I b3類
47	新ひだか町東静内	1971年	北海道博物館	23354	I b3類
48	新ひだか町東静内	1971年	北海道博物館	23355	I b3類
49	新ひだか町東静内	1971年	北海道博物館	23356	I b3類
50	鶴居村	1978年	国立民族学博物館	H0033609	I b3類 (長型)
51	鶴居村	1978年	国立民族学博物館	H0033610	I b3類 (長型)
52	旭川市	1978年	国立民族学博物館	H0062310	I b3類
53	旭川市	1978年	国立民族学博物館	H0062312	I d3類
54	平取町二風谷	1981年	国立民族学博物館	H0090742	I f3類
55	平取町二風谷	1981年	国立民族学博物館	H0090743	I f3類
56	平取町二風谷	1981年	国立民族学博物館	H0090744	I f3類
57	旭川市	1986年	北海道博物館	114675	I b3類
58	平取町二風谷	1988年	国立民族学博物館	H0158321	I f3類
59	浦河町	1993年	国立民族学博物館	H0189046	I f3類
60	浦河町	1993年	国立民族学博物館	H0189047	I f3類
61	浦河町	1993年	国立民族学博物館	H0189051	I f3類
62	新ひだか町東静内	2006年	新ひだか町静内アイヌ民俗資料館	10382	I a1類
63	新ひだか町東静内	2006年	新ひだか町静内アイヌ民俗資料館	10384	I a1類
64	新ひだか町東静内	2006年	新ひだか町静内アイヌ民俗資料館	10319	I b2類
65	新ひだか町東静内	2006年	新ひだか町静内アイヌ民俗資料館	10380	I b2類
66	新ひだか町東静内	2006年	新ひだか町静内アイヌ民俗資料館	10316	I b3類
67	新ひだか町東静内	2006年	新ひだか町静内アイヌ民俗資料館	10317	I b3類
68	新ひだか町東静内	2006年	新ひだか町静内アイヌ民俗資料館	10318	I b3類
69	新ひだか町東静内	2006年	新ひだか町静内アイヌ民俗資料館	10320	I b3類
70	新ひだか町東静内	2006年	新ひだか町静内アイヌ民俗資料館	10381	I b3類
71	新ひだか町東静内	2006年	新ひだか町静内アイヌ民俗資料館	10383	I b3類

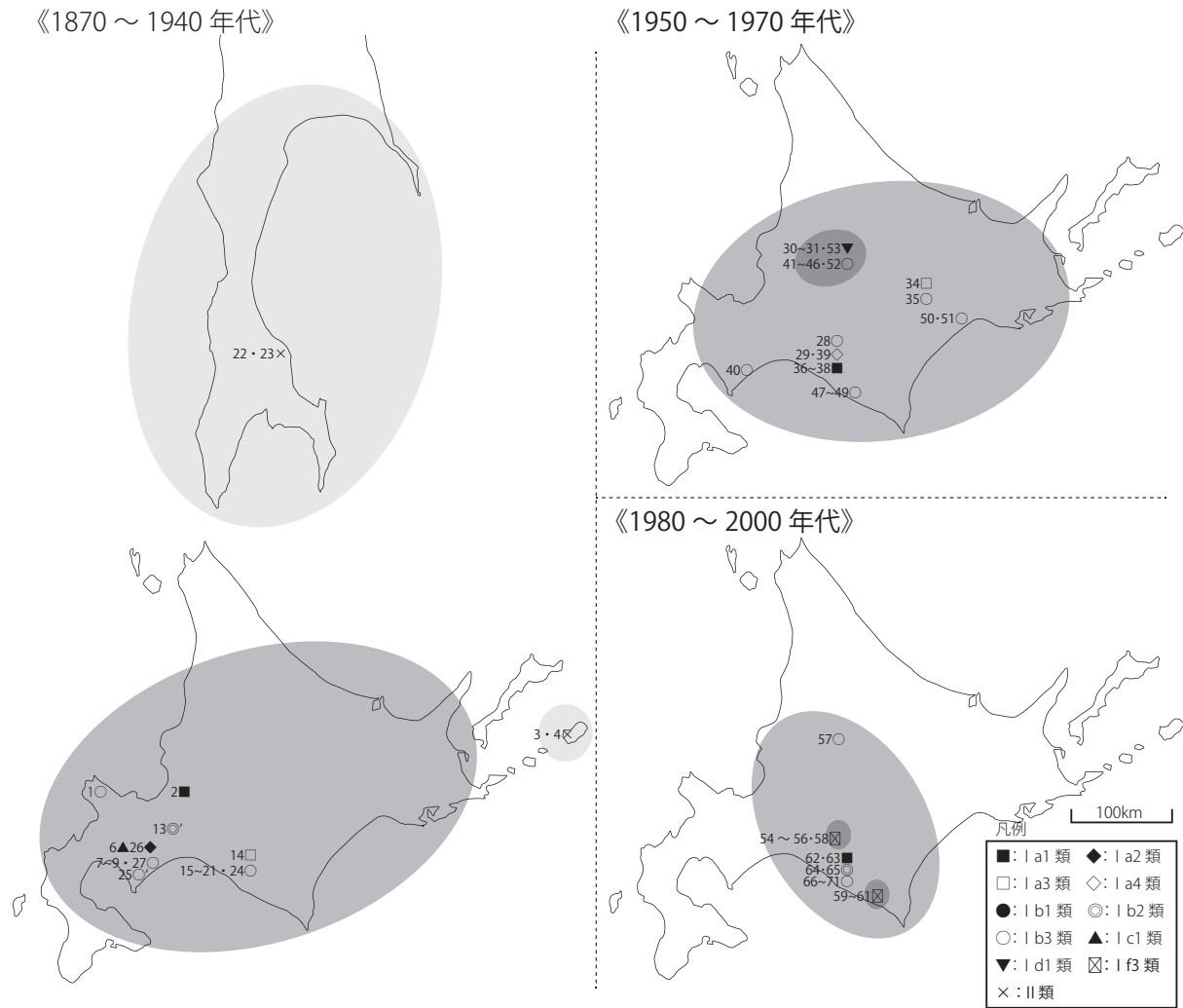


図11 分布図（番号は表6に対応）

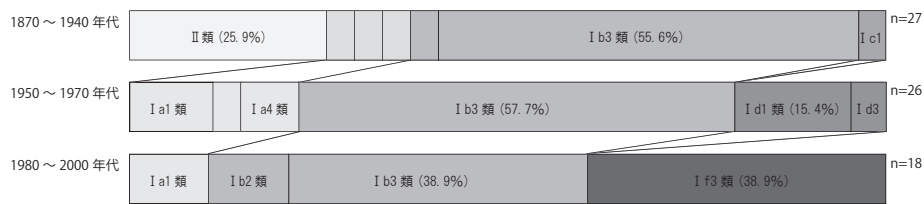


図12 背景情報が明らかな資料の収集年代別組成比

町⁽²⁵⁾で出現し、その後、浦河町・平取町で主要な技術となった経緯が明らかになっており、本稿の結果もそれとおおむね一致するものと言える。このことは、逆説的ではあるが、日高地方で収集された技法A1・B1による資料は1980年代以降に収集されたものであっても、製作年代がI類よりも遡る可能性が高いと判断する指標となる。

6 用途による形態差

(1) 用途による形態差の検討方法

2(9)で述べたように、先行研究では用途に関わって「小さい」、「長い」といった観点が示されてきた。本章では、I類のうち最も資料数が多いIb3類を分析対象として、以下の三つの属性の相関関係を検討し、民族誌記録と対照することで用途を推定する。

(25) 前稿の時点では、平取町で用いられる技術体系を「技術体系3」として、技法B1を用いるものと考えていたが、その後の調査で、平取町では技法B1とB2が併用されていることが確認された（図6：3・4）。ここで訂正する。

計測値

額当ての縦・横の計測値を乗じた数値、及び分岐部＋縄部の計測値を対象とする。前者は額当ての面積の近似値と見なす。後者は、破損がないものでは左右で長さが顕著に異なる事例が存在せず、一部が破損した資料の場合でも片側の計測は可能なものも少なくないことから、片側のみの数値を用いる。

経糸切断の有無（図13）

従来注意されていなかった属性として、文様部から分岐部に移行する部分で経糸を切断して本数を減らす資料の存在が確認された。経糸の切断は引っ張り強度の低下に直結することから、用途一特に日常用か葬送儀礼用か一に関連する属性である可能性が想定される。

使用痕の有無（図14）

使用された痕跡が擦痕として認められるか否かを記載するもの。軽度の使用では擦痕が生じないと考えられるうえ、分岐部～縄部の途中で使用痕の有無や素材が変化しており「補修」過程が介在した可能性が高い資料も存在するため、この属性が荷縄が実際に使用されたか否かを完全に示すものと考えすることはできない。また、製作の時点で想定していた用途と使用の場面のズレが存在していた可能性もある点に限界があるものの、確実に使用したものを判別する属性としては十分に有効と考えられる。

(2) I b3類の分類と用途の推定

計測値が全て検討可能なもの91点を対象に、計測値と経糸切断及び使用痕の有無の関係に示した（図15）⁽²⁶⁾。内訳は、「経糸切断有り」16点、「使用痕有り」15点⁽²⁷⁾、その他60点である。属性の組み合わせにより、以下の3群に分類することができる。

A群：分岐部＋縄部の長さが2mを上まわり、使用痕があるものを伴う群

B群：分岐部＋縄部の長さが2m以下で、使用痕があるものを伴う群

C群：分岐部＋縄部の長さが2m以下で、経糸切断があるものを伴う群

額当て「縦×横」の数値を比較すると、A・B群と比較してC群は顕著に数値が小さい。C群は使用痕があるものを全く含まないうえに、引っ張り強度の低下を招く経糸切断が顕著に認められる。

以上の結果から、大型のA群・B群が日常用として製

作・使用され、小形で経糸切断が見られるC群は葬送儀礼用に製作されたものと推定され、計測値と「経糸切断」の有無が、用途を判別する指標として一定の有効性をもつことが想定できよう。

C群は荷縄の形態を留めているものの、重量物を支えるために必要な形態から逸脱しており、葬送儀礼の際に軽量の副葬品を結束することのみを目的として、「仮器化」が進行したものであるということもできる。

なお、「経糸切断有り」のうち、A群に含まれるものが1点存在するが、この資料は幕別町で収集されていることから十勝地方の地域差を示す可能性もある。ただし、当該地域は資料数が僅少なため、ここではその事実を指摘するに留める。

(3) 民族誌記録との対照

用途による使い分けの民族誌記録は、北海道東部の鶴居村、白糠町、釧路市阿寒、本別町でクマ神用を他と混用しないとする記録があり（表7）、素材や文様が異なるとされる事例も含まれている。しかし、具体的な長さの違い等に関しては、2（7）で紹介した萱野の記述を除けば極めて乏しい。萱野が生まれ育った平取町二風谷に隣接するペナコリに生まれた川上まつ子は、薪拾い・農作業用は*attem etutem*（1尋半）、男性が山猟で用いるものは*tu tem*（2尋）としている（表7：A1）。沙流方言の記録では、*tem*（尋）は約1.5m（田村 1996：710）、約1.8m（萱野 1996：323）とされ、*attem etutem*は約225～270cm、*tu tem*は約300～360cmとなる。川上の口述は片側の分岐部＋縄部の長さに関するものとみるのが妥当だろう。

本稿のA群の計測値は、川上が日常の薪拾いなどに使用しているものと重なり、前節での機能推定を傍証するものと見なすことができる。*tu tem*に近い数値を示すものとしては、ロシア科学アカデミー人類学民族学博物館所蔵資料の中に全長が641.5cmに達する資料が報告されている（表6：9）。こうした資料が山猟用に製作されたものであった可能性がある。B群は、使用痕があるものを伴い、経糸切断が見られないことから、実用品であったことは疑いない。萱野が指摘したように、子負など、長さが必要とされない用途に使用された可能性も想定される。

(4) 分岐部形態と機能の相関

2（1）で確認したN.G.マンローの記述や、日高東部での民族誌記録（表7：D1）では、分岐部の形態が日常

(26) 額当てが顕著に横長になるものがあり（表5：45・46）、形態のローカルな地域差を示す可能性がある。

(27) 本稿の対象資料では、「経糸切断有り」と「使用痕有り」が共存する資料は存在しない。



1 (北海道博物館 23083)



2 (新ひだか町静内アイヌ民俗資料館 10319)



3 (北海道博物館 23087)



4 (新ひだか町静内アイヌ民俗資料館 10383)

図13 経糸切断の例



1 (市立函館博物館 民族 780)



2 (市立函館博物館 民族 1011)

図14 使用痕の例

用と葬送儀礼用を分ける特徴とされてきた。図15の分析対象資料のうち、「使用痕有り」では例外なく分岐部が4本、「経糸切断有り」では16点中15点(93.7%)が分岐部3本となっており、分岐部形態と機能は比較的確な対応関係にあるように見える。

ただし、「経糸切断無し」、「使用痕無し」に分類される「その他」60点のうち、分岐部の形態が「4本」ないし「3本」のもの58点を対象として計測値をプロットした場合(図16)、分岐部「4本」のものが相対的に大型、「3本」が小型となる傾向は認められるとはいえ、両者の分布は大きく重なっている。分岐部の形態が4本か3

本かは、ゆるやかな傾向を示すものの、単独で用途を判断する属性とは考えがたい。

民族誌記述が得られたのと同じ新ひだか町静内で収集された資料の中には、顕著な経糸切断が認められながら分岐部が4本となる事例も確認されている(図13:4)。日高東部においては、分岐部の形態が日常用・葬送儀礼用を分けるという規範意識が存在したことそのものは、民族誌記録の存在から疑う余地が無いが、規範意識の強さ、有無には地域内でも差異が存在したものと考えられる。

白老町で収集されたI a2類では、分岐部の形態が3本

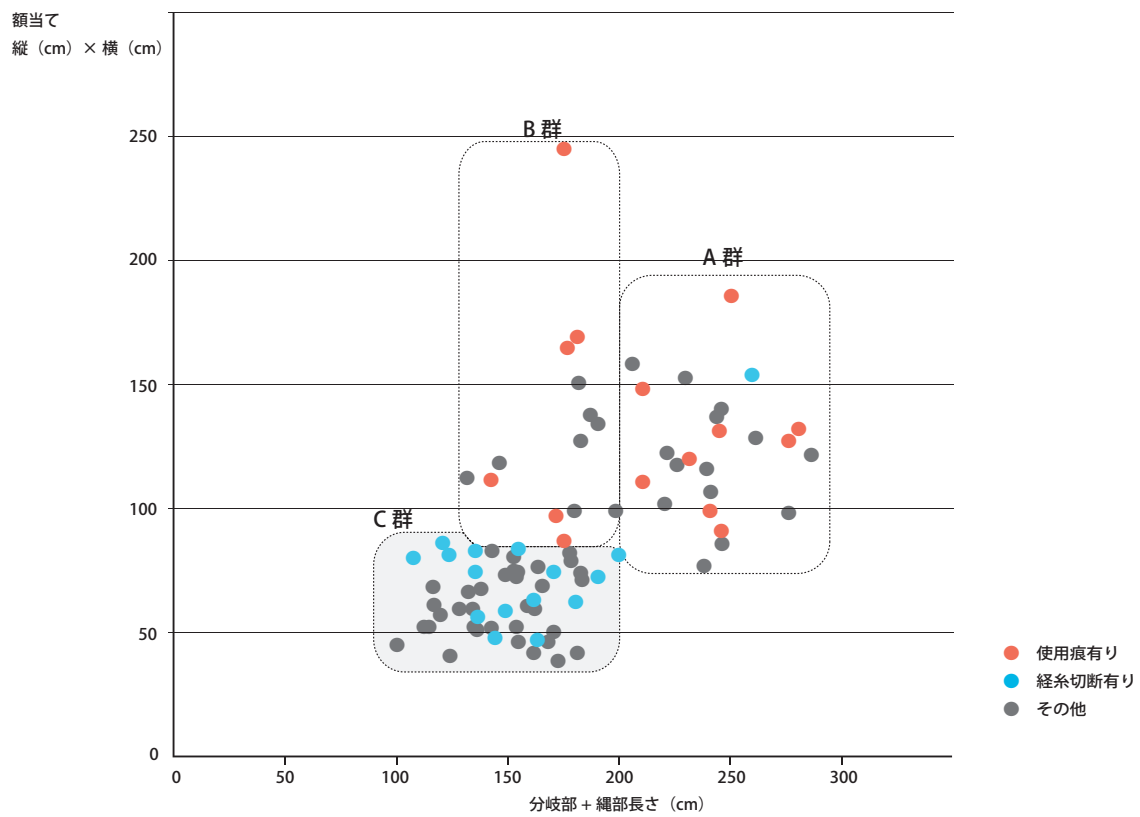


図15 I b3類における使用痕および経糸切断の有無と計測値の関係

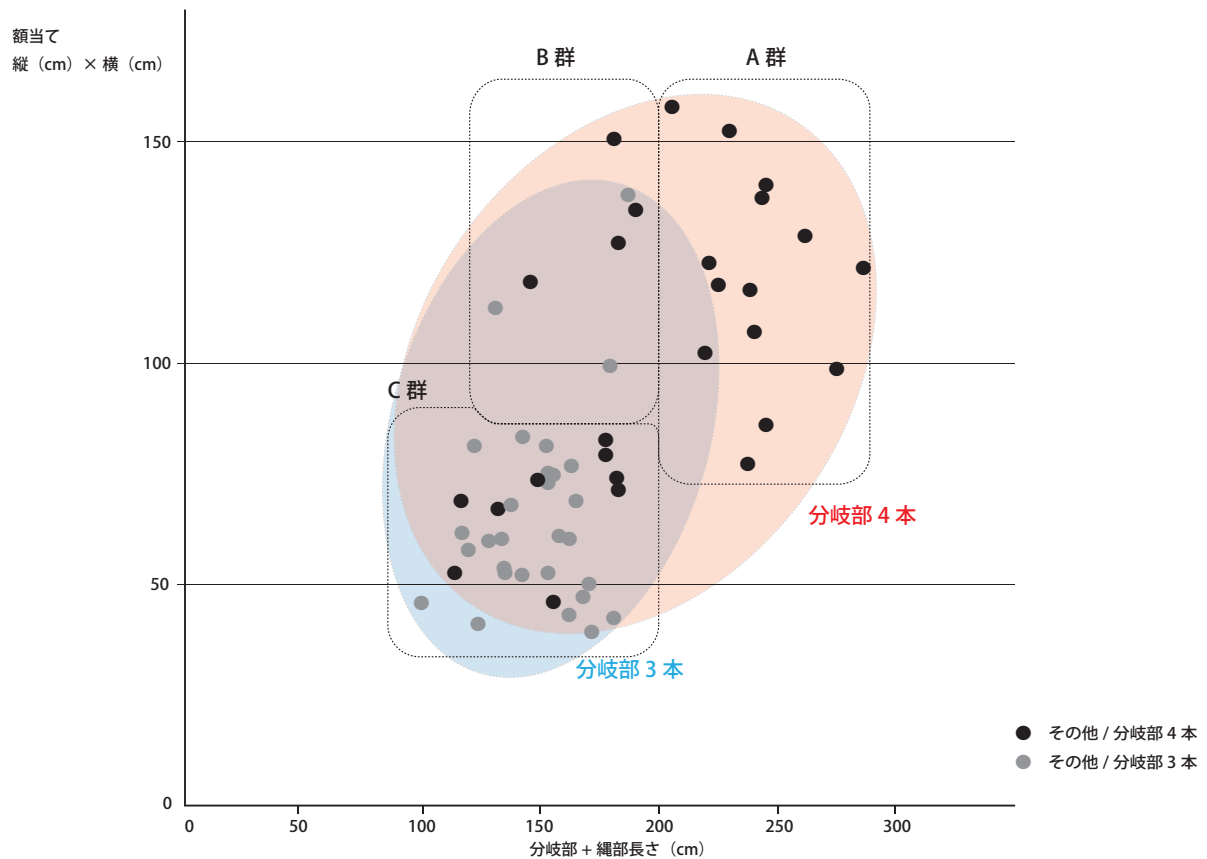


図16 I b3類における分岐部形態の分類と計測値の関係

表7 荷縄の使い分けに関する民族誌記述

更科源蔵『コタン探訪帖』

番号	頁	地域	調査年月日	
S1	9-48	鶴居	28.1.17	nina tara 薪を背負う荷縄 kimun tara 山獵の荷縄 menoko tara 女の荷縄 これでは熊の肉を背負えない kimun taraより太い ebere tara(kamuy tara) 仔熊の土産
S2	18-11	三石	37.11.20	tar 男と女と模様ちがふが、熊負うのも他も同じ。
S3	18-66	芽室太	38.1.28	tara 男女の別なし、運搬するものによつても区別しない
S4	18-72	白糠	38.1.31	Kimun Kamuyをはこぶtaraは別にする マタギのときのtaraと薪背負ふのちがふ
S5	18-84	阿寒	38.2.4	荷縄 (tara) 熊の肉を背負ふ荷縄Kamuy tara (他の物を背負はない) 鹿の肉や魚は普通のtara 男と女と同じ

北海道教育委員会『アイヌのくらしと言葉』

番号	頁	地域	調査年度	
D1	2-156	静内 農屋	1978	(萩) シアンパタラっていうのはあの一・・・少し、短い・・・ (織) うん、短い。して、みーみ (荷縄中央部の額に当てる部分から両側に紐が出る部分)、3つ (片側3本ずつの編み紐) しか付いていない、

北海道教育委員会『アイヌ民俗文化財調査報告書』

番号	頁	地域	調査年度	
D2	VII-80	十勝 本別	1987	カーパイ kapay (イラクサの一種) (※ムカゴイラクサ：筆者注) でつくったカムイタル (背負い縄の一種) は近い山でスマウアン sumaw an (熊を取る) したときに、カムイアル kamuy aru (熊肉) を背負うのに主に使う。モセ mose (イラクサの一種) (※エゾイラクサ：筆者注) でつくったものはなんにでも使う。

財団法人アイヌ民族博物館『川上まつ子の伝承—植物編1—』

番号	頁	地域	調査年度	
A1	146	平取 ペナコリ	1986	昔のマタギで、タラチヒ (taracihiその荷縄の紐部分) も特別長く。アツテム エトゥテム (ar tem etutem1尋半) っていうって、計ってこしらうもんなんだと。そのマタギエカシ背負うものは、トゥテム ネ アカラ ペ ネ (tu tem ne a=kar pe ne 2尋に作るものだ) っていう話も聞いたことある。 (中略) おれたちみたいに薪背負いとか畑のもの片付けて背負って歩くおかっという荷縄は、アツテム エトゥテムあればいいんだっていうんで。

※：素材に関する記述を除く。

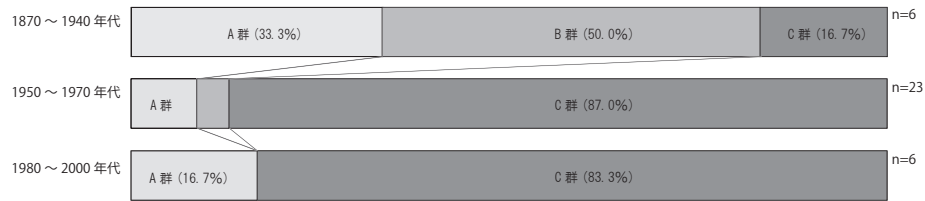


図17 胆振・日高地方収集 I b3類の年代別組成

でありながら額当てが大型で顕著な使用痕が全面に残された事例が存在する（図9：2）。本別町では、クマ猟に用いる I a1類のkamuy tar「クマ神用荷縄」が、分岐部が3本となっている例が紹介されている（北海道教育委員会 1988：88, 図版4）。こうした地域の中には、日高東部で記録されたような規範意識が全く存在しなかった場合が含まれる可能性も想定しておかなければならない。

7 荷縄使用の変容

以下では、I b3類について、1870～2000年代まで通事的な検討が可能な胆振・日高地域を取りあげ、組成の年代学的変化を検討する。なお、1950～1970年代に関しては背景情報が明確な資料が不足しているため、次善の策として、胆振・日高地域が主な収集地と推定される北海道博物館所蔵近藤幸吉コレクションを加えることとした。

年代別の集計結果（図17）では、1940年代以前と以後では、収集資料に占めるC群の比率に明確な違いが認められる。具体的には、1940年代以前にはA・B群が収集資料の83.3%を占めるのに対し、1950年代以降では一貫してA・B群が20%を下回り、C群が80%以上を占めている。

前章で検討したように、大型のA群・B群が日常用として製作・使用され、経糸切断が多数見られるC群が葬送儀礼用と考えられることを前提にすれば、収集資料の組成の変化は、日常生活の中での荷縄使用の衰退と、葬送儀礼用としての荷縄使用の継続を示すものと見られる。

荷縄の製作は、1970～80年代を境に技法B2を用いる I f3類にシフトしていたものと考えられるため、2000年代に入っても I b3類C群が日高東部の新ひだか町静内で収集されている事実は、葬送儀礼用として1970年代以前に製作された荷縄が、少なくとも40年以上にわたって地域内で保持されてきたことを示す。この地域は、アイヌ民族の伝統的な葬送儀礼が1970～80年代まで盛んに行われていた地域で、減少したとはいえ近年でも実施された事例があり、葬送儀礼用の必需品としてのC群の役割が近年まで継承されていたことが、博物館収蔵品の組成に反映されたものと考えられることができるだろう。

8 さいごに

本稿では、製作技術と素材から荷縄を分類して地域差を確認し、さらに機能による形態差については、法量と使用痕、経糸切断の有無に着目した解釈を示した。結論をまとめると以下ようになる。

- 1) 荷縄は形態から I 類と II 類に分類され、I 類は北海道本島、II 類はサハリン及び千島列島に分布する。
- 2) I 類のうち I d1類は旭川市周辺に固有の分布を示す。
- 3) 1950～70年代には、木綿布を緯糸とする I a4類が出現しており、その背景には和人の物質文化からの影響及び木綿布の入手環境の変化が考えられる。
- 4) 1970年代以降には技法B2を用いる I f3類が出現し、同じ製作技術を用いる刀帯や死者用靴と連動した変化を見せる。
- 5) 荷縄 I b3類の分析結果と民族誌記録の対照から、大型で使用痕跡を伴う事例が多いA・B群は日常用、小形で経糸切断が多数含まれるC群は葬送儀礼用に製作されたものと推定される。
- 6) 日高東部での民族誌記録で葬送儀礼用か日常用かを分けるとする情報があつた分岐部の形態については、同地域のA・B群とC群で異なる傾向性が看取されたが、単独で葬送儀礼用か否かを判断する属性とまでは言えない。葬送儀礼用と日常用の作りわけには個人レベルで規範意識の強さ、有無の相違が存在したものと判断される。
- 7) 収集年代別の組成比は、実用品は消耗され残りにくい反面、葬礼用は家族の使用分も含めてストックされるため残りやすいことに加え、実用品としての荷縄使用が衰退するなか、多数の葬送儀礼用の荷縄が数十年という年代幅で長期間保持されてきたことを示すものと解釈できる。

謝辞

本稿をまとめるにあたり、奥田統己、北原次郎太、古原敏弘、高野啓子の諸氏・諸先生よりご教示を賜ったほか、資料調査に際して所蔵機関の飯岡郁穂（旭川市博物館）、伊藤昭和（浦河町立郷土博物館）、大矢京右（函館

市教育員会)、加藤克(北海道大学北方生物圏フィールド科学センター)、齋藤玲子(国立民族学博物館)、長田佳宏・関根健司(平取町立二風谷アイヌ文化博物館)、藪中剛司(新ひだか町博物館:調査時)の諸氏、諸先生からご協力を賜りました。末筆ながら記して感謝申し上げます。ただし、存在するであろう全ての誤りは筆者に帰する。

引用文献

- アイヌ民族博物館 1999. 川上まつ子の伝承—植物編1— アイヌ民族博物館伝承記録4.
- SPbアイヌプロジェクト調査団編 1998. ロシア科学アカデミー人類学民族学博物館所蔵アイヌ資料目録, 草風館.
- 大坂 拓 2016. 北海道アイヌの儀礼用冠について—北海道大学植物園・博物館所蔵資料の検討—. 北海道博物館アイヌ民族文化研究センター研究紀要 1: 23-42.
- 大坂 拓 2017. アイヌ民族の刀帯—分類群の共時的分布と通時的分布—. 北海道博物館アイヌ民族文化研究センター紀要 2: 1-32.
- 大矢京右・大野徹人 2013. 市立函館博物館所蔵「椎久コレクション」: 八雲アイヌの民族資料とアイヌ語音声, 北海道立アイヌ民族文化研究センター研究紀要 19: 33-73.
- 大矢京右 2015. 函館博物館旧蔵資料ラベル考, 千島樺太交換条約とアイヌ: 平成27年度特別展, pp. 38-46.
- 大矢京右 2017. 見玉コレクションの収集経過とその周辺, 市立函館博物館研究紀要 27: 1-40.
- 岡村吉右衛門 1962a. 日高アイヌの編物 その一, 民芸手帳 48: 34-39, 東京民芸協会.
- 岡村吉右衛門 1962b. 日高アイヌの編物 その二, 民芸手帳 49: 32-37, 東京民芸協会.
- 岡村吉右衛門 1972. 「アイヌ造形研究」ノート, 玉川大学文学部論叢 12. (ゆまに書房編集部編 2001. アイヌ語考③語彙Ⅱ, に再録)
- 岡村吉右衛門 1977. 日本原始織物の研究, 文化出版局
- 荻原真子 1998. アイヌ文化研究におけるアイヌプロジェクトの意義, SPbアイヌプロジェクト調査団編 1998. ロシア科学アカデミー人類学民族学博物館所蔵アイヌ資料目録, pp. 97-103, 草風館.
- 荻原真子・古原敏弘・ヴァレンチーナ V. ゴルバチョーヴァ編 2007. ロシア民族学博物館所蔵アイヌ資料目録, 草風館.
- 奥田統己編 1999. アイヌ語静内方言文脈付き語彙集(CD-ROMつき), 札幌学院大学.
- 加藤 克 2004. 札幌農学校所屬博物館のアイヌ民族資料, 北大植物園研究紀要 4: 1-54.
- 加藤 克 2008. 北海道大学植物園所蔵アイヌ民族資料について: 歴史的背景を中心に, 北大植物園研究紀要 8: 35-91.
- 萱野 茂 1978. アイヌの民具, すずさわ書店.
- 萱野 茂 1980. アイヌの碑, 朝日新聞社.
- 萱野 茂 1996. 萱野茂のアイヌ語辞典, 三省堂.
- 北原次郎太 2012. 二谷国松口述知里真志保筆録 新築祝いの祈り詞, 千葉大学ユーラシア言語文化論集 14: 263-305.
- 金田一京助・杉山寿栄男 1941. アイヌ芸術 第一巻服装編, (復刻版1973北海道出版企画センター)
- 久保寺逸彦 1956. 北海道アイヌの葬制—沙流アイヌを中心として—統一, 季刊民族学研究 20(3・4): 54-101.
- 河野広道 1956. アイヌの生活, 楡書房
- 小杉 康 1997. 物質文化からの民族文化誌的再構成の試み—クリールアイヌを例として—, 国立民族学博物館研究報告 21: 391-502.
- 小谷凱宣・萩原真子 2004. 海外アイヌコレクション総目録 文部科学省科学研究費補助金(2001~2003年度)基盤研究(B)(2)研究成果報告書第2冊, 南山大学人類学研究所.
- 古原敏弘編 1999. バラートシバログコレクション調査報告書, 北海道立アイヌ民族文化研究センター.
- 財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構編 2007. アイヌ生活文化再現マニュアル 編む—タラ・エムシアツ—.
- 財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構編 2008. アイヌの工芸—ベンシルバニア大学考古学人類学博物館ヒラーコレクション—.
- 財団法人アイヌ民族博物館 1993. 亮昌寺資料目録.
- 財団法人アイヌ民族博物館 1999. アイヌ民族博物館伝承記録4 川上まつ子の伝承—植物編1—.
- 財団法人アイヌ無形文化伝承保存会 1987. アイヌ文化伝承記録映画ビデオ大全集 フチとエカシを訪ねて 第4巻〜織る・奏でる・祈る〜.
- 財団法人アイヌ無形文化伝承保存会 1991. アイヌ文化伝承記録映画ビデオ大全集 アイヌ文化を伝承する人々 第3巻〜イカラカラ・ノミ・イタク〜.
- 佐々木利和 1997. 東京国立博物館のアイヌ民族資料(上)北海道立アイヌ民族文化研究センター研究紀要 3: 1-22.
- 佐々木利和 1998. 東京国立博物館のアイヌ民族資料(下)北海道立アイヌ民族文化研究センター研究紀要 4: 1-14.
- 市立旭川郷土博物館 1975. 市立旭川郷土博物館所蔵品目録 IV.
- 市立旭川郷土博物館 1978. 市立旭川郷土博物館所蔵品目録 VI.
- 市立函館博物館 1979a. アイヌの狩猟用具そのほか 国指定重要民族文化財「アイヌの生活用具コレクション」整理報告書5.
- 市立函館博物館 1979b. 市立函館博物館蔵品目録-1民族資料篇.
- 杉山壽栄男 1940. アイヌの編物, 人類学雑誌 55(2): 63-79.
- 杉山壽栄男 1942. 日本原始繊維工芸史 土俗篇.
- 高野啓子 2004. エムシアツの文様の調査研究(アイヌ女性の手仕事 1).
- 田村すず子 1996. アイヌ語沙流方言辞典, 草風館.
- 知里真志保 1954. 分類アイヌ語辞典人間篇.
- 津田命子 2003. アイヌの組紐—アイヌの民具に見られる組紐の組成と種類について—.
- 帝室博物館編 1930. アイヌ風俗品陳列目録.
- 鳥居龍蔵 1903. 千島アイヌ, (1976. 鳥居龍蔵全集 第7巻, に再録).
- 萩中美枝・河野広道 1967. —Aynuの下紐に関する覚書 I—, 北海道の文化 13.
- 林 善茂 1959. アイヌの収穫・貯蔵技術, 北方文化研究報告 14: 1-41.
- 藤村久和 1976. 民族調査ノート(3)白老地方の慣習, 北海道史研究 2: 82-90.
- 北海道アイヌ協会平取支部 1952. 北国の神秘を語る アイヌ写真帖.
- 北海道開拓記念館 1981. 民族 I 北海道開拓記念館収蔵資料分類目録 1.
- 北海道開拓記念館 1998. 小倉・北海道観光物産興社・W・カーティスコレクション他資料目録 北海道開拓記念館一括資料目録第32集.
- 北海道開拓記念館 2003. 旧拓殖館所蔵民族資料コレクション資料目録 北海道開拓記念館一括資料目録第37集.
- 北海道教育委員会 1977. 昭和51年度アイヌ民俗文化財緊急調

- 査報告書(有形民俗文化財 1).
- 北海道教育委員会 1984, 昭和59年度アイヌ民俗文化財調査報告書 アイヌ民俗調査 IV(静内・浦河・様似地方).
- 北海道教育委員会 1988, 昭和62年度アイヌ民俗文化財調査報告書 アイヌ民俗調査 VII(沙流・十勝地方).
- 北海道教育委員会 1991a, 平成2年度アイヌ民俗文化財調査報告書 アイヌ民俗調査報告書 X(千歳).
- 北海道教育委員会 1991b, 平成2年度アイヌ無形民俗文化財記録刊行シリーズ IV アイヌのくらしと言葉 2.
- 北海道教育委員会 2003, 平成14年度アイヌ無形民俗文化財記録刊行シリーズ 16 アイヌのくらしと言葉 8.
- 北海道教育委員会 2017, 平成28年度アイヌ民俗文化財調査報告書 アイヌ民俗技術調査8(産育に関する民俗技術).
- 北海道大学北方生物圏フィールド科学センター植物園編 2008, 北大植物園資料目録 6 アイヌ民族資料.
- 北海道立アイヌ民族文化研究センター編 2005, ビリカ会関係資料の調査研究(北海道立アイヌ民族文化研究センター調査研究報告書 I).
- 幕別町教育委員会 1992, 吉田菊太郎資料目録 I.
- 三浦泰之 2001, ウィーン万国博覧会と開拓使・北海道 北海道開拓記念館研究紀要 29: 177-206.
- 満岡伸一 1987, アイヌの足跡(8版). 白老民族文化伝承保存財団.
- 山田伸一 2000, 拓殖館のアイヌ民族資料についての覚書 北海道開拓記念館研究紀要 28: 179-198.

欧文

- N. G. Munro 1962, Ainu: Creed and Cult, (小松哲郎訳 2002, アイヌの信仰とその儀礼).
- Torii, R 1919, Etudes Archeologiques et Ethnologiques. Les ainou des Iles Kouriles, *Journal of the College of Science, Imperial University of Tokyo* 42(1): 1-337

図版出典

- 図1、図3-1、図10-4・7: 北大植物園・博物館提供
- 図2、図3-2: 函館市中央図書館所蔵写真を部分拡大
- 図4～9、図10-3・5・6・8、図13、図14: 所蔵機関の許可を得て筆者撮影
- 図11、図12、図15～17: 筆者作成

Typological Study of Burden Strap of the Ainu

OSAKA Taku

In this article, the burden strap used by the Ainu people was targeted for analysis, and classified as below, focusing on production method and materials, and differences by region and time period were identified (Fig. 11).

Type I a1:Fig. 9 : 1

Type I a2:Fig. 9 : 2

Type I a3:Fig. 9 : 3

Type I a4:Fig. 9 : 4

Type I b1:Fig. 9 : 5

Type I b2:Fig. 9 : 6

Type I b3:Fig. 9 : 7・8

Type I c1

Type I d1:Fig. 10 : 1

Type I e1:

Type I f3:Fig. 10 : 2

Type II :Fig. 10:3—7

In addition, regarding Type I burden strap distributed throughout Hokkaido, the size of the material, with or without warp cutting and traces of use were set as the criteria, and interpretation to identify differences according to function was presented. Based on the analysis results, consideration of the composition of materials stored in the museum was carried out. As a result, it was clear that the burden strap used by the Ainu people continued to be used as a funeral burial accessory, even after it was no longer used in daily life (Fig. 17).